

<所内資料・改訂版>

全国マスジド（モスク）代表者会議・次世代部会

「一若者世代とイスラム、日本一」の記録

2018年2月3日

July, 2019

早稲田大学多民族・多世代社会研究所

Institute for Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University

早稲田大学イスラーム地域研究機構

Organization for Islamic Area Studies, Waseda University

目次

目次.....	2
序.....	3
プログラム.....	4
編者.....	5
会議運営者・協力者.....	5
編集協力者.....	5
関連研究助成プロジェクト一覧.....	5
会議出席者・オブザーバー.....	6
議事録.....	7
第1部 若者世代がイスラム、日本社会とどう向き合ってきた・いるのか.....	7
第2部 若者世代から見た今後のムスリムコミュニティ・日本社会.....	28

序

本報告書は、2018年2月3日に早稲田大学（早稲田キャンパス）で開催された全国マスコ（モスク）代表者会議・次世代部会「**若者世代とイスラム、日本**」の会議録である。本会議は、2009年に「全国モスク代表者会議」として始まり、2012年に名称を「全国マスコ（モスク）代表者会議」と変更して、継続して開催している。滞日ムスリムの若者世代をお招きし非公開形式で開催した今回は、主催者側を含め15名近くの参加者があり、充実した報告と忌憚のない意見交換がなされた。

今回の会議では、若者世代の外国人ムスリムと日本人ムスリムの方々にお集まりいただき、家族や成長の過程、そして現在の生活実態から貴重なご経験やご意見を語っていただいた。具体的には、①若者世代がイスラム、日本社会とどう向き合ってきた・いるのか、

②若者世代から見た今後のムスリムコミュニティ・日本社会、が取り上げられ、活発な議論が展開された。

会議開催にあたっては、滞日ムスリムの若者世代の方々をはじめ多くの人たちから多大なご協力をいただいた。これら沢山の皆様に厚く御礼申し上げ、これからのご協力についても改めてお願いする次第である。

付記：最初の5頁程度の議事録の部分を追加して、改訂版とした。

2019年7月

岡井 宏文
店田 廣文

プログラム

第10回

『全国マシド（モスク）代表者会議・次世代部会—若者世代とイスラム、日本』

日時：2018年2月3日(土) 09:30~12:00

於：早稲田大学・早稲田キャンパス（地下鉄東西線早稲田駅より徒歩5分）

26号館 702教室

早稲田キャンパス内地図：<https://www.waseda.jp/top/access/waseda-campus>
<https://www.waseda.jp/top/assets/uploads/2014/08/75fbe93c96f198b17f2f294320b48990.pdf>

主催：早稲田大学多民族・多世代社会研究所

早稲田大学イスラーム地域研究機構

早稲田大学アジア・ムスリム研究所

スケジュール：

09:30-09:40 開会の挨拶 早稲田大学人間科学学術院・助手 岡井 宏文

09:40-10:45 第1部 若者世代がイスラム、日本社会とどう向き合ってきた・いるのか

10:45-11:50 第2部 若者世代から見た今後のムスリムコミュニティ・日本社会

11:50-12:00 閉会の挨拶 早稲田大学多民族・多世代社会研究所長 店田 廣文

司会：早稲田大学人間科学学術院・助手 岡井 宏文

早稲田大学人間科学研究科 クレシ 愛民

参加予定者：

ムハンマド グフロン ヤジッド氏

ラフマリア アウファ ヤジッド氏

ハニ フィルディア ヤジッド氏

アフメド アリアン氏

最日伝 シヤハラ氏

角岡 姫奈氏

林 純子氏

ホワイト マティーン氏

ダルウィーシュ 奈菜氏

西澤 シヤヘレヤール 氏

礼拝室：26号館7階 701教室、703教室

編者

(所属は 2018 年 2 月現在)

岡井 宏文 早稲田大学人間科学学術院・助手

店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授

会議運営者・協力者

(所属は 2018 年 2 月現在)

店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授

長谷部圭彦 早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員

岡井 宏文 早稲田大学人間科学学術院・助手

小野 亮介 早稲田大学人間科学学術院・助手

小池 寿裕 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程

クレシ愛民 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程

ゴインシ 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程

編集協力者

(所属は 2018 年 2 月現在)

クレシ愛民 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程

関連研究助成プロジェクト一覧

本会議および本報告書は、以下の研究助成による研究成果の一部である。

- ・「人間文化研究機構 (NIHU) プログラム イスラーム地域研究」(早稲田大学拠点) 研究代表者: 桜井 啓子
- ・平成27～29 度科学研究費補助金基盤研究 (C) ・課題番号15K03886 「滞日ムスリムの生活世界の変容とムスリム・コミュニティの持続的発展」研究代表者: 店田 廣文
- ・平成30～32 度科学研究費補助金基盤研究 (C) ・課題番号18K01976 「滞日ムスリム・コミュニティの地域社会活動と地方自治体の多文化共生政策の課題」研究代表者: 店田 廣文

会議出席者・オブザーバー

(順不同・敬称略、所属は2018年2月現在)

岡井 宏文 早稲田大学人間科学学術院・助手
長谷部圭彦 早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員
クレシ愛民 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程
店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授
ムハンマド グフロン ヤジッド氏
ラフマリア アウファ ヤジッド氏
ハニ フィルディヤ ヤジッド氏
アフメド アリアン氏
最日伝シャハラ氏
角岡 姫奈氏
林 純子氏
ホワイト マティーン氏
西澤 シャヘレヤール氏
ダルウィーシュ 奈菜氏
アンマール ジャミール氏

付記：

議事録の作成にあたり、発言内容を損なわない範囲で、語句の追加や修正、余分な語句の削除や説明の追加などを行った。聞き取りの困難なところについては、一部削除したところもある。編者が説明として追加した部分や注記は、()で明示した。なお、発言者ご本人の希望で、発言内容を伏せた部分があります。

議事録

第1部 若者世代がイスラム、日本社会とどう向き合ってきた・いるのか

クレシ ……あとは、写真ですね。もし、どなたか写真は NG だっていう方がいらっしゃいましたら。大丈夫そうですかね。分かりました。では、会議なんていう名前ですが、本当に皆さんで気軽に話し合えればなんていうふうに思っております。まずは皆さんの自己紹介。まだ、ご面識のない方とかもいらっしゃると思いますので、1人ずつ自己紹介も兼ねて、今回のテーマであります日本の次世代ムスリムの環境、彼らが置かれている現状だったりとか、今後に向けての話だったりとかっていうのをしていきたいと思っておりますので、自己紹介を兼ねて何か一言ずつ、大体1分前後でお話いただければと思っております。何か活動をされている方、それをご紹介いただける方がいらっしゃいましたら、あわせて5分程度でその紹介もしていただければというふうに思っております。では、大丈夫ですかね？ 分かりました。では、アウファさんからお願いしてよろしいですか。

アウファ 私から？

クレシ はい。自己紹介をお願いします。

ダルウィーシュ ちょっと、こんな、ものすごい人から始めないでください。

一同 (笑)

マティーン どっち回り？

クレシ どっち回りでいきますか。

ダルウィーシュ こっちから。

マティーン こっち回り。自己紹介させていただきます。おはようございます。

一同 おはようございます。

マティーン アッサラームアライクムワラフマトウツラーヒワバラカートッフ。ホワイト・マティーンと申します。日本に来て、ちょうど13年と1カ月ぐらいたちます。アメリカ出身で、生まれ（ボーン）ムスリムです。私の両親が1970年代にキリスト教徒からイスラム教徒に改宗しました。そして、当時のムスリムコミュニティが、結構、まだ小さいようでした。その中で、あまり周りのイスラム教徒ではない方が、イスラムのことに対しては、あまり知らない中で、私と私の7人きょうだい、育てました。そして、日本と同じように、ムスリムではない社会でムスリムとして育ちました。両親の、普通の大人と若手の関係と、ムスリムではない方の関係について、きょうは、もし話すことができれば紹介したいと思います。

クレシ お願いします。ありがとうございます。

林 アッサラーム・アレイコム。林純子です。きょう、もしかして私だけ改宗ムスリムですか。

ダルウィーシュ そうかも。

林 私、17年前に改宗しまして、アメリカにちょっと留学したんですけど、そのときに改宗して、入信して、日本に帰ってきて、いろいろやってる間に日本にもムスリムの弁護士がいたほうがいいなと思ったり、自分の人生、なんか面白くないなと思って、ちゃんと仕事をしたいなと思って弁護士を目指しました。早稲田のロースクールに来て2年前から弁護士をしています。最近の活動としては、仕事が忙しくてっていうところが、結構、あるんですけど、やりたいなと思っているのは、日本でムスリムの人権問題とかを取り扱っている人たちって、多分、あまりないので、そういうのを実務的な面から何かできたらいいなというのと、あとは、日本でムスリムって圧倒的にマイノリティだと思うので、他のマイノリティと一緒にやっていくっていうのが不可欠かなと思っていて、他の外国人に限らないですけど、外国人支援をしている人とか、いろんなタイプのマイノリティの人たちの活動と手を組んでっていうのを積極的にやっていきたいと思っているところです。

クレシ ありがとうございます。

角岡 アッサラーム・アレイコム。私は、角岡姫奈と申します。私はパキスタンと日本の

ハーフで、ボーンムスリムです。生まれはパキスタンなんですけど、ずっと栃木県で育て、きょうだい6人いるんですけど、栃木県ですごく田舎のほうだったので、ずっとムスリムが周りにいない環境でずっと育ってきて、今はアルハムドゥリッラー、落ち着いた生活を。主人が日本人で、子どもが1人いて、すごく落ち着いた生活をしてるんだけど、結構、思春期の頃とかは、そういう意味で理解者とかが周りにいなかったんで、結構、大変な生活だったなという思い出があるんですけど、そういうことを踏まえて、自分の経験を踏まえて、あと、きょうだい6人もいるので、いろんなパターンのケースがうちにはあって、そういうことを踏まえて、いつかどこかで第2世代の意見をもう少し届けられる場があったらなとずっと思っていたので、この機会に皆さんといろいろとお話できることを、すごく楽しみにしてきました。よろしくお願いします。

クレシ　　お願いします。ありがとうございます。

ダルウィーシュ　私のこと知らない人っているんですかね。すいません。1分でまとめられるか分からないんですけど、取りあえず、アッサラーム・アレイコム。私はイラクと日本のハーフで、父が日本人で母がイラク人ですけど、父は去年、他界してしまっただけですが、母がムスリムなので父が改宗して、結婚して、私がすぐ生まれたんですけど、当時はバグダッドで生まれて、ちょっと日本に帰ったんですけど、母が日本が、その頃、30年以上前とかだったので、全然、イスラムとかそんな環境とは無縁で、ラマダンとかも1人でひっそりやるみたいな、そういうのがすごく耐えられなかったみたいで、ちょっと父にお願いして、どこか中東に移住したいって言って、なぜかエジプトになったんですけど、エジプトに8年ぐらい住んで、ドイツに移住して、これは学校の都合なんですけど。両親が離婚してしまって、母がイギリス人と再婚したので、イギリスに移住して、そこで大学とか勉強したんですけど、ちょっといろいろ事情があって、ここでは全て話せないんですけど、10年ぐらい前にやっと日本に、本帰国してきました。

その頃からは、普通の社会人。全然、会社とか行って、そのときはヒジャブとかかぶってなかったんですけど、4、5年ぐらい前からかぶるようになって、そこからかぶったときに気付いたのが、ヒジャブ、全然、買えないじゃんって思って、海外から輸入しないと、特にかわいいのとかないなって思って、それで、社会人をやりつつも副業としてムスリム系のアパレル商品の輸入と販売を始めて、それと同時進行でHALAL LIFEっていう雑誌。多分、日本で初めて出した情報誌だと思うんですけど、ムスリム向けの。その編集と英訳も始めて、会社は辞めて、子どもが生まれてお母さんをやってるんですけど、母親をやってる間は全て活動を中止したんですけど、その間、たくさんのムスリムの方が割と私の

お店に頼って、これはやめちゃいけないって思って、また再開したと同時に、あれもこれもやりたいっていろいろ出てきてしまって、YouTube やったり、ブログをやったり、今は個人の企画ですけど、改宗ムスリムを中心に私の改宗ストーリーって名前のショートドキュメンタリーをつくっていて、撮影も、編集も全部自分でやっていて、今、3人目を編集中です。

クレシ おー素晴らしい。

ダルウィーシュ そんな感じです。よろしくお願いします。

クレシ よろしく申し上げます。ありがとうございます。せっかくなので、アンマール君も自己紹介していただいて。

ジャミール はい。分かりました。アッサラーム・アレイコムワラフマトウッラー。アンマール・ジャミールと申します。パキスタン生まれで、日本育ちで、今はマレーシアに留学しています。父親が結構、アクティブなムスリムで、イスラミックサークルオブジャパンという組織の幹部になります。そういうこともあって、ちっちゃい頃から、結構、そういうプログラムに連れていかれたりして、育っていくうちに、自分にもイスラムを伝えるという責任があるんじゃないかということに気が付き始めて、マレーシアで、そういった勉強をしてインシャーアッラー、帰ってきたときには、そういった活動をしていきたいと思っています。ありがとうございます。

クレシ ありがとうございます。

アリアン アッサラーム・アレイコムワラフマトウッラー。多分、この部屋の中で、彼、お子さま以外には2番目に下なんですけど、今、高校3年生をやっております。この春から早稲田大学に進学することになりました。僕は生まれがドバイで、両親はパキスタン人で、日本に15年前に来たって感じで、結構、いろいろあるんですけど。僕のお父さん、まあどっちもパキスタン人ってということもあるので、ちっちゃい頃から大塚モスクのほうなんですけど、そこに通わされたとか通って、そこで、クルアーンを全部ヒフズして、アルハムドゥリッラー、今ハーフィズなんですけど、そういったこともあって、日本の学校生活を経験したりして、今、実際、自分の周りの子たちの話もいろいろ聞いて、自分の話も含め、そういう若い世代の、もうちょっと現状的な点も含めて話せたらと思いますの

で、よろしく願いいたします。

クレシ ありがとうございます。

西澤 ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム。アッサラーム・アレイコムワラフマトウッラー。僕のお父さんはパキスタン人で、お母さんは日本人です。名前は西澤シャヘレヤールといいます。生まれはパキスタンなんですけど、育ちはほとんどが日本で、行ったり来たりもしてたんですけど、岩手のほうで学校に通って、大学で埼玉のほうに来て、それからイスラムの勉強とか始めたりして、今は仕事とマドラサを両立しながらやっています。あとは、活動としては通訳とか翻訳とか、そういうのも、今、ウルドゥー語から日本語とか、これからもっと勉強して、他の言語、アラビア語からとか、英語からもやっていきたいと思っています。よろしく願いします。

クレシ お願いします。

シャハラ アッサラーム・アレイコム。モヒディン・シャハラといいます。きょうは大阪から来ました。私の父はスリランカ人なので、私はスリランカと日本のミックスになります。今は、京都の龍谷大学で心理学を勉強しています。去年、11月、12月とサウジアラビアに語学留学に行ったんですけど、サウジアラビアって、イスラム教を国教としているため、100パーセントムスリムなんですね。日本はムスリムが0.1パーセント未満っていう、すごいマイノリティな世界で、サウジアラビアと日本って、すごい正反対な環境で、改めて日本って私たちにとってすごい生きづらい環境というか、そういうのでいろいろ考えていて、なので、きょう、こういうふうにしてきな機会をいただけて、すごいうれしいです。よろしく願いします。

クレシ お願いします。

ハニ アッサラーム・アレイコム。私は両親がインドネシアで、東京生まれ東京育ちで、3人きょうだいなんですけど、一番上の姉です。ずっと日本の幼稚園、普通の日本の学校に通ってて、ムスリムとしていろんな葛藤もありました。今は、インドネシア人の人と結婚して、子どもが3人。上が、今、幼稚園。4歳の子なんですけど、代々木上原のモスクの所にあるインターナショナルスクールに、ムスリムのインターナショナルスクールに通わせています。第2世代の今度は親として、今後、子どもをどう育てていくか、どう育ててい

けばいいかが、今、悩みです。こんな、いろんな第2世代が日本にいるんだっていうのは、すごいびっくりしています。みんな友達になれたらうれしいです。よろしくお願いします。

クレシ お願いします。

グフロン アッサラーム・アレイコム。はじめまして。グフロンと申します。姉と妹に挟まれた真ん中で、同じように東京生まれ東京育ち。両親はインドネシア人です。大学、大学院を経て、4月から、友愛イスラミックスクールという所で教師をしています。美術と、国語、日本語を教えております。その学校は基本的に皆さんと同じ第2世代の子たちが通っている学校で、ほとんどが日本語ネイティブなんですが、数人、学校の10パーセントぐらいいは、日本語がしゃべれない、話せない子になります。なので、基本的に学校の中では日本語が行き交っていて、ただ、学校の公用語は英語にしようという感じだそうです。そこで美術と日本語を教えております。学校やる傍らでフリーランスで映像を作ったりとか、あとは趣味でいろいろ作ったりしてるんですが、ちょうど12月に文化祭がありまして、それ用に映像を撮り下ろしたので、ご紹介を兼ねて今から流したいと思います。

クレシ お願いします。

(音楽)

ダルウィーシュ めちゃくちゃいい。

一同 (拍手)

グフロン ありがとうございます。学校で教師をやっていることもあって、生徒たちと深い話を正面向かって話すことがたくさんあって。やっぱり第2世代の子どもたちなので、親との間の葛藤とか、あとムスリムとして、マイノリティとして過ごす上での苦悩とかって、話をよく子どもたちとするので、今日はそういうのを共有できるかなと思っています。

クレシ ありがとうございます。

アウファ 何を話せばいいかあれなんですけども。アウファといいます。3人きょうだいの一番末っ子です。同じくインドネシア人の両親の元、東京生まれ東京育ちで、幼稚園から

大学に至るまでずっと、日本の学校に通っていました。今は大学を卒業してからは、六本木にあるアラブイスラム学院という所でアラビア語を今、学んでおります。その傍らでは、パソコン使ってもいいですか。

ダルウィーシュ これが楽しみです。絶対アウファちゃんに勧めた方がいいでしょ、自己紹介。

アウファ 基本的に全然大したことはしてないんですけど、私の生活スタイルは好きなことをやっていこうっていう感じで、日々好きなことをやらせてもらっています。どんなことをやってるのかっていうと。

(音楽)

アウファ こんな感じで私は写真を撮ることが好きで、ファッションが好きなんですけども、ヒジャブを身に付けて、写真を撮って、SNS とかを利用して発信をしています。自分で撮ったものなんですけど、こういうふうに、ヒジャブを付けたのは 4 年前なんですけども、もともとヒジャブのイメージだとか、イスラムのイメージが堅いとかそういうイメージがあったので、大学で自分だけが浮いてる感じだとかが嫌だったので、なじむようなそういうスタイルをどんどん考えていくうちに楽しくなって、それを共有したいなっていう思いがあったので、今。すいません。こちらは日本の着物をイメージしてコーディネートしたもので、ヒジャブにも可能性がたくさんあるんだよっていうのを、イスラムを知らない日本の方だとか、あとはちっちゃい子どもの世代の子たちに、ヒジャブはとってもおしゃれとか、楽しむことはできるんだよっていうのを伝えたくて、自分からこういう写真を撮ったりしてます。これ最近の自撮りで、雪の所で撮りました。こちらは日本の服でも、イスラムのファッションが実現可能だよっていうのを紹介したくて。これは昨日撮ったばかりの写真です。そんな感じで、やっています。

ダルウィーシュ なんか大丈夫？ 聞いて。

一同 ハハハ

アウファ これちょっと、あれなんです。アルハムドリッター、運がいいことに、人とのつながりもたくさんあって。この前は松屋銀座で、ムスリムのインバウンドプロジェクト

みたいのがありまして、それにお誘いをいただいて、兄が映像編集をしたんですけど、そのモデルとして採用していただいております。

(音楽)

アウファ っていう感じになります。

一同 (拍手)

アウファ こういう活動を通して、メディアとかの活動を通して、日本人やイスラムを知らない人や、これからイスラムを知りたい人に知ってもらうきっかけになればと思います。私の紹介はこんな感じです。

クレシ ありがとうございます。こういう親世代がいて、こういう次世代がいて、こういう日本社会があつてという、この日本で生活する次世代ムスリムであるからこそ、それぞれの経験によって、いろんな着眼点があつて、違いもあつて、本当に多岐にわたる活動がそれぞれあるんだなというふうに感じました。今、一人ずつお話をさせていただきましたが、誰か話しているときも口を挟むというか、発言していただいて、会話になればなと思つているので、自由に気軽に発言いただければと思います。

この日本で生活する上で、この環境にいるからこそさまざまな良い思いもあれば、先ほども少し挙がりましたが、つらい思いだったりとか、悩み、葛藤だったりとかというのも、それぞれ経験する方もいれば、経験しない方ももしかしたらたくさんいらっしゃるかも分からないんですけども、そういったところも、時間が許す限り、いろいろと伺いたいなと思つています。早速ですが、グフロンさん、何かその辺りで、ご自身の活動だったりとかも踏まえてご意見いただければと思います。

グフロン 先ほども申し上げたんですが、学校にはたくさんの第 2 世代の子どもたちがいて、いろんな悩みを、日々耳にしてるんですね。皆さんも第 2 世代なので、きっと彼らと同じような苦悩とか葛藤というのを越えて今ここにいると思うんですが。一番やっぱり大きいのは、親との関係とか、友達との関係であつたりとかなんですが、僕自身も普通に日本の幼稚園から最後まで大学まで日本にいたので、生徒たちと同じような環境の中で、同じように苦悩してきたので、すごく彼らの気持ちが分かるんですけど。例えば、ちゃんとしたムスリムとして生きていってほしいという親からの期待と、それに向き合えない思春

期のときの自分みたいなのが、きっと皆さんあると思うんですが、そういうところについて、日本の社会で生きていく中で、こんなことを悩んだとか、こんなことが一番難しかったとかあれば、ここで聞いてみたいと思うんですが、何かありますか。

クレシ マイクありでもなしでもどっちでも。

ダルウィーシュ 私、多分声でかいんで、マイクなくても大丈夫かなと思うんですけど。

クレシ ハハハ。お願いします。

ダルウィーシュ 悩みは多分、大体みんな共通してると思うんですけど、でも 100 パーセント日本人で、ハーフで、外国人で、同じムスリムでも全然違うと思うんですね。私の場合だとダブルで問題があって、エジプトには住んでいたんですけど、でも日本人学校に通っていたわけで、日本人の環境の中で育ったんですけど。まずハーフであるってことがすごい壁があったんですね、他の人と。もしかしたら、生まれたときから日本にいたらちょっと違ったかもしれないんですけど、私は母がアラブ人なので、アラビア語しかしゃべれなかったんですね。そのまま小学校に入学してしまったので、まず言葉が通じないっていう壁があって、全然話せないから、周りも、なんだこいつみたいなの、日本人じゃないじゃんみたいなの状況があって。その上、ムスリムってなると、例えばラマダンとかだと、当時は私だけがムスリムだったので、自分だけお昼を食べないとか、そういうところでも、それだけでいじめになったりとか、なんで食べないんだとか、ラマダンだからって言っても、ラマダンってなんだよみたいなの。やっぱおまえは日本人じゃないんだなみたいなの。どうにかして私を、日本の社会から追い出したいみたいなの、排除したいみたいなののがすごいあったんですよ。面白いことに、外国に住んでて、日本人のほうが外国人であるにもかかわらずっていう感じだったんですけど。

ハニ ラマダンのときとか、先生からなんか促した、ラマダンだから何しますよっていう。

ダルウィーシュ 一切フォローもなかったし、みんなエジプトに住んでるのに、エジプトって多分ほぼムスリム社会なんですけど、でもエジプトを理解しようとか、宗教を理解しようって姿勢が一切なくて、私たちはどこにいても日本人で、日本人らしく生きなきゃいけないみたいなの、多分狭い社会であればあるほど、それをキープしようとするんですよ。その中に自分だけ異質な存在みたいなのがいるわけで、なんだこいつみたいなの。

行事とかも親がちょっとクレマーだったんですけど、学校に配慮、理解をしてほしいみたいなふうには、1人だけ特別扱いするわけにはいかないみたいなのがあって、さらにその噂が親に回っては、子どものほうにも浸透してきて。コサカっていうんですけど、旧姓は。コサカの家ってちょっと...みたいなのがあったんですよ。そういうのが中学まで続いたんですよ。

なので、本当このダブルパンチが自分にはきつくって、どうしたかっていうと、私は本当に日本人なんだよっていうのをなぜか証明したくなっちゃったんですよ。そうするには、自分がハーフっていうか、もう半分のほうのアイデンティティーを消さなきゃいけないんですけどね。さらにムスリムであるってことも、やめるみたいな。やめたい。私はムスリムでも、ハーフでも何でもなくて日本人なんです。認めてくださいみたいな。ほぼお願いしますみたいな感じになっちゃって。その中で親からのプレッシャーもあって、あなたは半分アラブ人なんだよ。あなたはムスリムなんだよ。それを誇りに思っほしいって言うんですけど、親がまず、中東にありがちなことなんですけど、イスラムが、ラマダンをするとか、お祈りをするとか、そういう形式のことだけ、とりあえずなんでやるのかを分かってなくてやっていて、そのまま次の世代にどんどんどんどん継承されていって、本人たちもなんでそれをやらなきゃいけないのか、本当の教えっていうのを知らないまま、子どもに教えようとするんですよ。私は、なんでやらなきゃいけないのって質問投げると、うるさい！これはムスリムの常識なんだ！みたいな、えーみたいな。そういうのがこっちからもあって、日本の社会からも、日本人らしくしろみたいな、同時のプレッシャーに耐えられなくなって、こっちを選ぶみたいな。

グフロン 親のプレッシャーっていうのも、生徒たちもすごく、全く同じで。自分たちも同じなんですけど。ムスリムのマジョリティの国で過ごしてきた人たちにとって、マイノリティとして、マイノリティの国のムスリムとして生きることの大変さとか、たぶん分かってなくて。だからマジョリティで過ごした親たちっていうのは、お祈りすることが当たり前だし、クルアーン読むことが当たり前だし、断食なんてやんないなんてあり得ないみたいな。だからそれは分かってるでしょっていう感じで、きっと子どものことを見ていて。だから子どもがお祈りをしないのが、信じられないというか。だからお祈りをしないだけで、なんでお祈りしないんだって、先ほどおっしゃってたみたいに、親たちにとってはそれが、当たり前だから。ただ子どもは周りがムスリムではないし、ムスリムとして生まれただけで、まだやっぱりアッラーを信じてないとか。アッラーを信じてないのに、クルアーンを読むことに対してどういうモチベーションがあるかって考えると、そこで親子の間にフラストレーションがたまっちゃったりするので。大人でも、ああしろこうしろ

って言われたらいらいらしますよね。それなのに、子どももアッラーとか信じてなかったり、友達と遊びたくて、こっち行きたくて、あれやりたくてっていうのに、クルアーン読めとか言われちゃったりすると、逆にイスラムが嫌いになって。生徒の中にもやっぱり、ある地点で自分が独立的になったら、ヒジャブ外して、ムスリムやめるとか言ってる子とかもいて。そういう子たちが、親の世代とか、教師たちもそうなんですけど、マジョリティで過ごしてきた人たちは、マイノリティで生きてる子たちが、根本的にイスラムを理解してないってことを理解しない限り、フラストレーションというのはなくなる気がしません。

僕たちの親は30年ぐらい日本にいますけど、昔から、ムスリムがあまりいない時代からここにいて、彼らも同じように葛藤してきたと思うんですけど、あんまり強要されないような関係だったので、常にそばにいてくれる状態だったので、葛藤はありましたけど、何かあったときに、親に行けるような環境だったので。でもほとんどのうちの生徒の子たちを見てると。

ダルウィーシュ 味方がいない。

グフロン 味方がいない状態なので。

ダルウィーシュ 親も友達も社会もみんな敵みたいになっちゃってて、自分を理解してくれる、自分をそのまま受け入れてくれるっていうのがないんですよ。だから自分から、親のアッラーとか何とかっていうのは嫌だから、取りあえずこっちも楽しそうなほうにアダプトしようってなっちゃうんですよ。

グフロン さっきもおっしゃってたんですけど、言語の壁だけでも結構大きくないですか。

ダルウィーシュ 大きい。

グフロン 親と自分の言葉で、心と心で会話ができないってのが、すごく大きくて。

アウファ 味方はきょうだいだったよね。

グフロン ここは、アルハムドリッラーきょうだいがいたし、きょうだいも同じように葛藤をしたから、何か例えば友達が飲み会に行かって、自分が飲めなくて、ちょっと恥ず

かしい思いをしたっていうだけでも、今でこそ全然そんなのどうでもいいんですけど、昔はたとえば自分だけ豚を食べないとか、給食で自分だけメニューが違うとかということが、それが世界の全てなので、それだけですごい傷ついて、きょうだいに泣いて話をしたりしてってというのが、自分たちはいたから良かったんですけど、いない子たちって相当苦しいだろうなって。

それで、例えばヒジャブ付けてることだけでも、すごく親たちは尊敬しなきゃいけないのに、もっともっと、なんでこれをしないんだって言われたら、どんどん親が嫌いになったり、イスラムが嫌いになったり。

ダルウィーシュ 実は今でもあるんですけど。母親が結構、前はそんな敬虔なムスリムではなかったんですけど、どんどん年を取るにつれて、どんどん厳しくなってきた、今でも言われるんです、首を隠せて。うるさいとか思いながら。

グフロン ハニ ハハハ

ダルウィーシュ でも、子どものときとは違って、10代のときは「うるさい」とか普通に言ってたんですけど、今では、「はいはい、隠す隠す。」隠さないけど。口だけ。

林 さっき言われた言語の壁っていうのは、お父さんお母さんはインドネシア語が母語だけど、皆さんは日本語が一番できるからっていう。

グフロン そうですね。今は、インドネシア語、ネイティブぐらいしゃべれるんですけど、大学に入ってから、インドネシア人の留学生の友達とかができて、使うようになったので。前までは聞いて分かるけど、話せないみたいな状態で、親と会話するときに、親の片言の日本語と、こっちの片言のインドネシア語がぶつかるみたいな。それに加えて、宗教に対して理解してもらえない気持ちとかがぶつかって、どっちかっていうと10代のときは、「うるせえ」みたいな感じになったんですけど。

ダルウィーシュ この中でくれた人いないですか。

一同 ハハハ

グフロン ぐれました。

ダルウィーシュ ぐれました？

アウファ ぐれました。

ダルウィーシュ 仲間がいた。

グフロン ぐれたレベルがどれくらいか分からないですけど。結構普通の日本人の中高生みたいな生活してたんで、多分親はすごいハラハラしてたと思いますよ。ただうちの親は、多分戦略があって、友達は家に連れてきて遊んでね、みたいな。

アウファ お泊まり。

ダルウィーシュ そうそう。同じ同じ。

グフロン 僕たちがどこにも行かないように、お泊まりとかしたかったらうちでやっていいよとか、あとは親が僕たちの友達を把握するために、ホームパーティーしたときに友達呼んだりとか。親も一緒に、親もすごいアクティブな両親なんで。親も僕たちの友人関係とかを把握していました。

ダルウィーシュ めっちゃ一緒です。途中でお母さんが諦めて、この子は多分、何言っても無駄だみたいなレベルまで来ちゃったから、「分かった、もう自由にやっていい」って言われて、「えっ、いいの」みたいな。私もともとお酒とか飲めなくって、そういうのじゃなくって、ただ夜遊びとかしてみたいっていうのがあったり、お泊まりとかしてみたいって思ったり。それ全部やっていいよ。その代わり条件がある。それがまず、遊びに行くときは、一緒に遊ぶ友達の電話番号全部教えろとか、朝帰りするのকাশないのかちゃんと連絡するとか、お泊まりはうちだけいいよとか、たばこは家で吸いなさいとか。

一同 ハハハ

ダルウィーシュ 外で隠れて吸わないで、家で吸っていいからみたいな。でもその代わり一つだけ絶対守ってほしいっていうルールがあって、それさえ守ってくれば何してもいいっていうのが、男性関係は絶対駄目。それだけは守ってくださいって言われて、それだ

ったら楽勝じゃん。いけるいけるっていって。

グフロン うちの高校も、普通の日本の高校なんですけど、共学で、すごくみんなスカートが短いんですよ。親が、保護者面談とか、個人面談で学校に来たときに、「どうしようどうしよう」みたいな。ゴウちゃんって呼ばれてたんですけど、「ゴウちゃんちょっと、みんなこれ短過ぎない？」とか言って。「あんた大丈夫？」みたいな。「あの子たちなんであんなに短いの？」ってすごい心配されて。だからエキストラ心配ですよ。必要以上にどんどん心配しちゃったと思いますけど。でも、すごいことに親は全然、そんなにすごい介入してこなかったり、友情関係とかに関して、これは駄目、あの子駄目、この子と遊んじゃ駄目とか全然言われなくて。ただ親なりにすごい心配してたと思います。

ハニー 強要はしなかった。

グフロン 強要はされなかった。

ハニ ヒジヤブかぶってとかも強要しなかったし、礼拝の場所、学校に手配してあるからって。礼拝したかったらしてみたいな。私たち礼拝の場所あったんだよね、学校に。

グフロン 学校の教頭室を借りてたんですけど、礼拝はできるから、ちゃんとしてねとか。クルアーンも部屋に置いとくから読んでねとか。いつも夜の礼拝とか、わざと父が僕の部屋でやっていたり。クルアーンとかも、真夜中に僕の部屋で読んでたりして。

ダルウィーシュ あえて目の前でやる。

グフロン 何か悪いことしたいとかするたびに、このクルアーンを読む親のイメージとか。

ダルウィーシュ 分かる。それ夢の中とかもありませんか。

グフロン ありますよ。だから、「ゴウちゃん、お祈りしてね」みたいな。だから悪いことしようとするたびに。

アウファ よぎるんだよね、頭。

グフロン 「駄目よ、飲んじゃ駄目よ。遊んじゃ駄目よ」みたいな。

ダルウィーシュ 夢とかにも出てきたりするんですよね。

アウファ 高校時代とか、思春期だから、日本の男の子を好きになったりとかもあったんですけど、奈菜さんが言ったように、男性関係は駄目だよって言われたから、そのときに、ああしょうがないなって。

グフロン 出掛けるときとかもね、気をつけて行ってらっしゃい。

アウファ そのときは、イスラムの教えというよりも、親が言ってたから、みたいな。

ハニ クルアーンをちゃんとイスラムとして読んだのは……。

グフロン 大人になってから。

ハニ 大人になってから。私たちは。

アウファ 言ってしまうと、1週間半前くらいに、ちゃんと。

グフロン 出掛けるときも、「出掛けるね」とかいうと、「気をつけて行ってらっしゃい。火遊びは駄目だよ」。インドネシアなので、手にキスするんですけど、「行ってきます」って、「火遊びは駄目よ」みたいな。だから火遊びしようとする、「火遊びは駄目よ」ってこうつぶやきがあって、罪悪感があるみたいな感じで。

ダルウィーシュ 意外となんですけれど、割と中学、高校のときは、親厳しいなと思ってても、ちょっと大人になると、あれ、意外と緩かったかとも思いませんか？

グフロン そうですね。

ダルウィーシュ 実は私、後になって気付いたんですけど、うちの親、結構緩かったなって。当時はもっと自由にしたかったから、やっぱりお祈りしなさいって言われるだけでも厳しいって思っちゃった。

グフロン　うちの学校の生徒に、ヒジャブってまだ子どものうちは付けなくていいんだと思うんですけど、慣れさせるために、小学 1 年生から付けさせられてる子がいて、日本の学校で。今は、イスラミックスクールに来たので、全然大丈夫なんですけど、日本の学校で運動会のときとか恥ずかしかったとか言ってる話を聞いたときに、いつから付けてたのって聞いたら、小学 1 年生からって言って。親の意見を聞いたら、慣れさせるためって言ってたんですけど、でもその子のお姉ちゃんも昔から付けてて、さっきも言ったように、自分が自立できる年になったらヒジャブ外したいとか言っていたんですね。それ聞いたときに、形式っておっしゃってたんですけど、別にヒジャブを付けることって、その人の信仰があってそれを信じて付けるのが正しいはずなのに、強要で付けて、慣れてる状態で大人を迎えて、慣れてるからってファッションとして付けるっていうのは正しいのかなどうなのかなと思ってしまって。ヒジャブを強要させる親の気持ちって、子どもにちゃんとしたムスリムになってほしいし、周りの悪い影響を受けないようにしてほしいというのがあると思うんですけど、そういうふうに強要してしまうと、ある地点で爆発しちゃうんじゃないかなって思っていました。

クレシ　親世代の子どもへの接し方みたいなところで、いろいろお話が挙がったと思うんですけど、例えば強制する、強要する、これやりなさい、さっきおっしゃってたように、形式的なという言葉が挙がってましたが、礼拝だったりとか、断食だったりとか、あるいは今ヒジャブの話が出ましたが、そういったのを強要するものもあれば、例えば礼拝とかの話で、礼拝したかったらして、クルアーン読みたかったら読んでねとかっていうので、強要することはなく、むしろ親自身がロールモデルみたいな、目の前でわざとお祈りしたりとか、目の前でわざとクルアーン読んだりとかっていう。本当に親世代の中にもいろんなあり方があるんだなというふうに感じました。そういった親世代の子どもへの接し方だったりとかルール、形式的な側面の強要だったりとかっていうので、例えば、シャハラさんとか何かお考えとかあったりしますか。

シャハラ　私は父がスリランカなんで、サウジに行ったことで、一番カルチャーショックだったのが、日本とサウジの違いというよりも、スリランカの中でのイスラム教の形と、サウジの中でのイスラム教の形ってなので、すごいショックを受けて。結構サウジは、アバヤっていうのも女の人は身に付けてるんですけど、ニカブっていうのもしてて。でもニカブもアバヤもヒジャブも取れば、すごい華やかで、アメリカ人と日本人と全く変わらないみたいな、すごい肌を露出した服装だったりとか、化粧もすごい厚くやってたりだった

りとか、すごいキラキラしてて。私は、スリランカは結構、イスラム教でも厳しいイメージがあって、小さい頃から化粧もハラームだとか、ネイルもハラームだって言われてて。ヒジャブをしないと地獄に落ちるぞとか、音楽はハラームだとか。

ダルウィーシュ もう家出しますね。

シャハラ 本当に家出しないだけでも、私はえらいと思ってるんですけど。すごい厳しくて。でも、大きくなるにつれて、化粧とかネイルとかは、礼拝のときに取れば別にハラームじゃないんだとか、自分の中で生きやすいようにというか、頑張ってみつけてきて、今も化粧とかもしてるんですけど、やっぱり父の前ではしてませんし。ヒジャブはまだちょっと自分の中では抵抗があって、小学校の頃に初めて学校にヒジャブをしたときに、生徒にはなんか言われるやろうなとは思ってたんですけど、まず最初に先生に、「えっ、何それ」って言われたのが、「どうしたん？」みたいな、笑われたのが、すごいショックで、それがもう忘れられなくて、今でもできないんですけど。ヒジャブをしてしまうと、やっぱり最初会ったときに、この子イスラム教だとか、私たち日本人と違うんだなっていう先入観っていうか、そこから入るじゃないですか。そうじゃなくて、まず自分っていう、シャハラっていうんですけど、私自身を見てもらって、その中の一部に宗教っていうのがあるんで、そういう段階で自分を知ってほしくて、だからあんまりヒジャブとかが、まだ抵抗があって。

クレシ そういうイスラム実践だったりとかっていうのを始めたりとか、友達の前でしたりとか、あるいは学校でしたりとかっていうので、嫌な思いをするとかっていうのは皆さんもあったりしますか。

西澤 結構今若い、主にハーフの穆斯林と会う機会が多くて、話をする機会もあるんですけど、やっぱりみんなコンプレックスを持ってるんです、自分がイスラム教ということに対して、強いコンプレックスを持って、なんでひげ生やしてんのか、こういう格好してんのか、ヒジャブしなくちゃいけない、ニカブしなくちゃいけないとか。みんな、自分がそれやると、日本人に交わらないとか、日本で住んでいけないとか、そう思ってるんですけど、意外と日本はいろいろ、今、結婚してるんですけど、市役所と話ししたり、病院の人と話ししたり、いろんなこと、シャリーアの問題があって話をする、以外と柔軟に対応してくれるんです、日本人というのは。自分たちがどうやってイスラムを表現するかというのがすごい大事。

家庭環境も、いろいろ子どももバラバラ、イスラムとのハーフ、モロッコのハーフとかも友達でいて、タイのハーフとか、いろんなハーフ本当に友達いるんですけど、みんなバラバラなんですよ、環境。みんな同じじゃない。地域によっても、例えば栃木県とかが、まだ、僕から言わせたら、モスクとかもあるし、岩手だったら、最近モスクできて、栃木の場所にもよるんですけど、東京だったら結構前からモスクあったし、岩手だったら学校1人しかいなかった。でも逆に、そういうときに、先に先生に話ししておく、ラマダン月だから、うちらは給食、食べないですとか、友達とかにうちらは弁当持ってくるとか。逆にすごい友達とかは、いいなって。弁当いいな、俺も持ってきてみたいみたいなことを言ってくれる。逆にここまで自分はイスラムのことに対してコンプレックスというのはなかったんですけど。

今、回り見ると、結構メディアのほうから、そういうメディアもあるし、両親の教育の仕方も結構問題があると思うんですけど。イスラムに強制はないし、強制するのも良くないです。でも励ますことはできるんです。なぜヒジャブをやらなくちゃいけないのか。それをちゃんと説明してあげると、納得するんですね。言葉の問題で、それをちゃんと説明することもできない。それも一つ別の問題なんですけど。まず言葉の問題で、ちゃんと説明できない。説明してあげると、なんで礼拝する、たとえば。ただ礼拝してる、サラートやりなさい言ったら、めんどくせえって。自分も高校のとき全然やってなかったんで、言われても、あーめんどくせえみたいな、聞いて流してる。でも、勉強していくと、サラートやると、何ももらえる、その代わりに何をアッラーが用意してくれてるのかを分かったら、自分でやるんですね、そういうの。今、お父さんとかお母さんは、そういう片方ムスリムの、文化も入って、ヒジャブ絶対、ヒジャブやりなさい、ナマーズやりなさい、断食やりなさいとかやっちゃうと、もう逆に反発しちゃう、イスラムに対して。それは家庭の教育の問題が、これから課題になってくと思います。どうやって子どもにイスラムを。

あとイスラムは形式的な礼拝だけじゃないんで。例えば嘘つかない、だまさないとか、すごい年上のこと尊敬するとか、子どもかわいがるとか、そういうのも全部イスラムにあるんです。でも私たちそういうのは家で、イスラムの中で学んでないです。日本の社会でそういうことを学んできたけど、イスラムでもそれを教えられていて、私たちはそれを学んでないです。イスラムは、逆に自分たちがこういう格好をしてて、僕はもうひげ生やしてるんですけど、会う人に、すごいカッコいいですねとか、家内はニカブやってるんですけど、市役所とか行くと、かわいいですねとか。逆に時々店行くと、小さい子どもに、忍者だとか言われたりするけど、逆に悪いことじゃないです、忍者って言われるの、ハハハ。みんなすごい忍者とか憧れるし、逆に前向きにとって。全然、家内も全然そういうの、周りの目、見ない。

日本社会とどう向き合うかっていうよりも、イスラムとどう向き合うかだと思うんです。私たち自身がイスラムとどう向き合うかによって、私たちの考え方とか生活が変わっていくと思うんです。だからそれが簡単っていうか、今自分で、強制とかいろいろあったかもしれないんですけど、やっぱりお父さんは子どものために考えてやってるわけなんで、課題としてはこれから結婚してこれから子どもも生まれてくると思うんですけど、そういうときにどうやって自分が家庭の中で、そういう環境とかを作っていくかが大事だと思ってます。

あと周りもどうやって表現していくか、ニカブをやることは何も、例えば大変なことではない。むしろ誇り、イスラムの。ひげ生やすことも。うまく表現していけば、そういうイメージを作れば、全部イメージなんです、そういうのが、メディアで、ニカブって大変とか。他の宗教でも、実はすごいもっと厳しいんです。ニカブに対して。例えばキリスト教のシスターは、結婚できない。肌も見せない。いろんなもっと規律があるんです。仏教とかネパールとかの話だと、もっと厳しいです。イスラムはまだまだ自由がある。シャリーアのなかで、どういう楽しみ方があるのか、それをちゃんと理解していけば、十分イスラムの中でもイスラムを守りながら楽しむことはできると思います。

アフメド 今、高校 3 年生の自分の、昔の話、高校の話とか色々聞いたんですけど、僕自身どういうふうに来てきたのかっていうと、まず僕は 0 歳から日本にいますけど、幼稚園の 4、5 歳ぐらいまでは幼稚園行かされなくて、親の元で、お母さんと一緒に普通に家で過ごして、いろいろ教育されてたっていうことで。日本語しゃべり始めたのが、幼稚園の最後の年の小学校 1 年生になる前に、最後の 1 年間だけ幼稚園に通って、そこで日本語を何とか身に付けて、そこから小学校に進学した感じなんですけど。それまでは、全部家の中で過ごした。

本当にウルドゥー語とかちょっとだけ英語をしゃべってたって感じで。先ほども言ったとおり、ハーフィズなんですけど、自分は結構環境に恵まれたなと。自分なりの葛藤はあったんですけど、いろいろ。本当に環境に恵まれて、お父さんのほうも、お母さんのほうも、お父さんの親もハーフィズで、その後にお父さんがアメリカとかヨーロッパとかもいろいろ回ってたので、親世代からの教育をどうやってするかとか言われたんですけど、僕はまずルールを押しつけられたんじゃないかと、そのルールを守ることによって何がいいことがあるのか、先ほど言ったことの繰り返しになるんですけど、そこも教えられて、そうすることで途中のことも、小学校の間、僕、大塚モスクに通って、長期欠席ということで、それははじめとかいろいろあったんですけど、それはまた別の話になるんですけど。

大抵ルールとか押しつけられると、そこでイスラムに関して言われると、自分へのコン

プレックスになると思うんですよ、普通は。普通はっていうか、みんなの話を聞いてみて思ったのと、周りの話を聞いて思うのは、日本人からおまえイスラムだろうみたいな、日本人じゃないんだみたいな感じに言われたときに、僕も多少あったんですけど、自分がなんでムスリムなのかっていうコンプレックスになるんですけど、ちゃんとした知識、なんでそういうことをやってるのかという、例えば先ほど出た、男女間の話になると、今イスラム教の中で、男女間というの、どういう価値観を持ってるのかというのを、周りに言うと、実際おまえロマンチックやなってめっちゃ言われたりして、どうもどうもみたいな感じで流すんですけど。

僕が思うには、日本人ってムスリムよりもムスリムなんじゃないか。でも本当に信じてないのはアッラーのことも、根本的なことだけ信じてないんですけど、結構習慣って、ムスリムよりムスリムだなって、僕は、親世代のあっちの言語をしゃべれて、日本語もしゃべれるっていう、どっちもネイティブ並みに最初からしゃべれてるってことで思ったんですけど、自分へのコンプレックスじゃなくて、そういうイスラムの、おまえなんでムスリムなんだみたいなことを言われたときに、いろいろテロとか言われたときに、自分へのコンプレックスじゃなくて、なんで相手はこれを分かってくれてないのかという。そこを僕としてはそっちのほうが多かったんですよ。真実っていうか、なんでこんなことをやってるのかって分かってたので、周りがテロどうこうみたいなことを言うと、そこで自分への誇りをなくすんじゃないくて、相手は分かかってないんだなって、教えてあげなきゃいけないっていう感情に僕はなれたんですね。それはなぜかと考えてみたら、環境に恵まれたんですけど、本当に親がすごくでかかったと思うんですけど。親にすごい、どっかに偏らないで、中庸の道を教えられて、そのルールを押しつけられたんじゃないくて、そのルールがなぜあるのかっていうそこを教えられました。

もう一つ言うと、僕は正直に言ってしまうと、最初からあっちの言語もウルドゥー語とか他の言語しゃべれたので。今も親世代と、子どもの周りの日本のムスリムともいろいろ悩みとかは聞くんですけど、親の悩みも結構聞かされるんですよ。うちの子どもどうにかしてくれみたいな。そういうふう結構いろんな家に家庭に訪問することもあるんですけど、そこは単純に思うのは、親世代も親世代で無知なんですよ。これはもう、悪気があるわけではないんですけど、第1世代は海外に住んできて、海外にいても大してそこまで知識がないんですよ。なぜかという、周りも別に豚とかアルコール食ってないし、別に自分も食わなくてもなんも変わったことないし、その知識を入れなくていいんですよ。でも日本だと、周りはアルコール、豚、普通にやる。自分たちは取りあえず、あちはやってなかった、こっちも駄目だよみたいな感じで教えて、そのままルールとか、なぜそれを守らなきゃいけないのか、それを言っちゃえば科学的な観点からして、なんでそれをやっ

てないのかとか、そこら辺の知識を身に付けられてないので。自分の親を称賛しているわけじゃないんですけど、そこら辺の知識は僕のお父さんのほうにすごく、お父さんがすごく努力して、教え込まれて、そこでなんか言われたときに、ちゃんと自分が信じた根拠を持って、伝えられたんですね、日本人の周りに。だからそういうのをあまり気にせずに。それとぐれたっていう話あったんですけど、言っちゃうと、大してぐれてないなって、僕はそういう人生だったんですけど。周りからいろいろ話を聞くと、やっぱり多少自分も何かあったんだなという感じで。あと日本人なんですけど、日本語での知識、本と違ってそうなんですけど、海外とか、YouTubeとかいっちゃえば、いろんな動画見れるんですけど、日本語では全然そういうのないので、僕はそういう動画も作る、さっきグフロンさんと、いろんな話したんですけど、これからお願いしますみたいな。

岡井 おー。

クレシ 結ばれたね。

一同 (拍手)

ハニ すごいと思います。

アリアン そういう動画とかも制作はしているっていうか、基礎的なことはもういろいろやっております。そんな感じで、僕の今まで思ったことを話しました。

グフロン 今高校3年生？

アリアン 高校3年生です。

グフロン すごいしっかりしてる。

アリアン いやいや。

グフロン 自分が高校3年生のとき、もうブックオフとツタヤ。

アリアン ブックオフめっちゃ行きます！

ダルウィーシュ 掛ける 2 ぐらいの年齢。

ハニ 親からのあれですよ。

アリアン 親の存在はすごくでかかったと思ってます。

第 2 部 若者世代から見た今後のムスリムコミュニティ・日本社会

(テーマを変えることなく、議論は継続して行われたが、編集上、ここを区切りとした。)

クレシ 環境に恵まれていたっていうのは何度もありましたけど、たぶんそこには今までの話にもあったように、さっき親世代が強制だったりとか、あるいは励ますなのかという言葉もありましたが、強制するのか、ルールだったりとかの背景を説明したり、知識を説明したりっていう、そもそものあり方。あるいは形式的な側面を強調するのか強調しないのかっていう、いろんな親世代のあり方があるんだなというふうに感じました。

知識っていうところなんですけど、親世代が子どもの世代に、イスラムをもちろん与えたいわけですよ。そういったところでの親世代の子どもへの望ましいアプローチの仕方みたいな、ものすごい難しい話ではあるんですが、何かそれについて例えば。あっどうぞ。

ジャミール 僕が小 5 のときに、父親から急に、学校で断食しろって言われて。どうしようと思って、正直嫌だったんですね。でも父親がしたアプローチっていうのが PSP 買ってやるって言われて。

グフロン ハハハ。

ダルウィーシュ 物でつる。

ジャミール いや、それはアルハムドリッラー、僕はそれが正しかったと思います。それで僕、習慣づけになって、アルハムドリッラー、それからずっと毎年やってこれてるので。

クレシ 毎年 PSP が。

一同 ハハハ

ジャミール 最初の1回だけです。毎年PSPは要らないです。

グフロン 次の年は何ももらったんですか。

ジャミール 次の年は、だんだん下がってって。ソフトになって。そんな感じで。今は何もないんですけど。そういう物でつるのも、正直ありっちゃありじゃないかなって感じですね。それと、親じゃなくて、学校の先生に対するアプローチも多分大事で、小学校3年生の頃に、2、3回ぐらい学校で断食することになって、多分慣れるためだったと思うんですけど。最初先生に言ったときに、先生がアルハムドリッター、すごい良い先生で、「おまえがみんなにそれを伝えろ」と言われたんですね。わざわざ一つの授業を設けてくれて、総合の時間か、道徳の時間で。そこで全部イスラムについて教えることになって。後日、サプライズで、僕には隠してて、同級生全員が僕に対して書いてくれたんですよ、授業良かったよとか、イスラムよく分かったよみたいなの。めちゃくちゃいい先生で、アルハムドリッター。という先生に対するアプローチも大事なんじゃないかなと思います。

クレシ 先生のアプローチっていうのは、ご両親が後ろでというか、お願いしていたのか、それとも先生がご自身で。

ジャミール 多分、父親が言って、僕が話すことになって。父親もそれ呼ばれて、パキスタンの国技であるカバディをみんなに教えるっていう。父親も楽しそうでしたね。

クレシ 環境に恵まれるっていう、さっきの言葉を借りると、親世代のあり方に恵まれるっていうのもあれば、学校に恵まれる、教師に恵まれるっていうのもあるのかなと思います。先ほどのシャハラさんのお話にもあったように、ヒジャブをかぶったらむしろ先生に笑われてしまったっていうケースもある中、こういった形でクラス全員でサポートしてくれるような素晴らしい環境の整った学校、あるいは先生もいらっしゃるんだなって思いました。

角岡さん、栃木にいらっしゃったんですよ。小学校や中学校も向こうですか。高校だったりは。

角岡 私はいろいろ複雑な経緯がありまして。それ話す前に、背景として、私は上のきょうだい2人が、お父さんが違って、純日本人なんですね。前のお父さんが亡くなってしま

って、父と再婚して、お母さんは改宗して、お兄ちゃんとお姉ちゃんも後から中学生のときに、自分で選んで改宗したっていう感じなんですけど。なので私の父親からしたら、私は実子の中では長女になってくるんですけど。そういう意味で、パキスタンあるあるかもしれないんですけど、パキスタン人のお父さんって、結構自分の国の文化をすごく好きで、子どもにもパキスタンを大好きになってほしいとか、パキスタン人になってほしいみたいなのところがあるんですけど。上のきょうだいに関しては、いい意味でだと思いうんですけど、諦めてて、私にはすごい力を入れてきてたというところがあったので、日本で育てようか、パキスタンで育てようかって。今私が思うと、両親もすごく迷走していたと思うんですけど。5歳のときに1回1人でパキスタンに、親戚の所に預けられて、おまえはもう向こうで育つんだみたいな感じで送られたんです。家族みんな日本にいて、私だけなぜかパキスタンにっていう。1年もしないうちに、さみしくなっちゃったから戻ってきていいよってなって、戻ってきて、小学校は日本に通って、でも中学になって、やっぱりパキスタン行こうかってなって、中学3年間パキスタンで過ごして。そしたらやっぱり日本にしようかってなって、今度は。日本の帰国子女で受験したんですけど、日本の女子校に通って。日本の女子校に通い直したんですけど、3年生のとき、センター試験直前になって、急になぜか分かんないけど、やっぱりパキスタンにしようかってなって。

クレシ ご両親のご意思で？

角岡 そうですね。

クレシ ご自身の意思ではなくって。

角岡 いや、私の意思は全く、もうずっとないんですけど。私は、きょうだいの中でも本当に、妹も弟も割と親に反抗できるタイプの性格だったんですけど、私はそれが全くできなくて、むしろつらいけど、言うこと聞いてくほうが楽になっていうタイプの子だったので。厳しかったので両親も、結構手が出ちゃうタイプだったので、そういうのも嫌だったし、言うこと聞いてくほうが楽になって思って、連れて行かれるままにどんどん流されてずっと過ごしてたんですけど。ずっと日本ではなくて行ったり来たりっていう感じの生活でしたね、私は。

クレシ そういった、もともとはというか、ムスリムであるっていうのも、自分の意思があったわけではなくって、自分が納得して受け入れてたものではなかったんですか。それ

が今、もしご自身でイスラムを受け入れているのであれば、そのきっかけだったりとか、何かあったりするんですか。

角岡 私はすごく不思議なことに、保育園もすごいちっちゃい頃から、アッラーというのはすごく心の中であって、自分にとっては心地いいものだったんですね。何となくそれぐらいのイメージだったんですけど。きっとイスラムはすごく人を幸せにしてくれる教えで、アッラーはすごくいい存在でっていう感覚はずっとあったんですけど、両親から伝わってくるイスラムってのはすごく自分にとっては苦痛だったんですね。とにかく厳しいイメージで、全然ハッピーになれないし楽しくないっていう。なのでイスラムに対してのコンプレックスとか、自分がムスリムだっていうことに対してのコンプレックスっていうよりは、イスラムを正しく理解できてなくて、それによって家族をハッピーにできていない両親に対するコンプレックスを、ムスリムに生まれて嫌だっていうよりは、この両親に産まれてきた、大変だっていうのが大きかったですね。

ダルウィーシュ ハグしたい。

グフロン 子どもたちの話してても思うのは、みんな口をそろえていうのは、できないことが多いとかっていうんですね。例えば本を読んでも子どもに対して、小説読んじやいけない、クルアーン読みなさいって言われてる生徒がいるんですけど、みんなムスリムはやっちゃいけないことが多くて楽しめないとか、これ駄目あれ駄目っていう、駄目なことばかりフォーカス、イメージがいつちゃってる感じしますけど。

角岡 父親もそんなにイスラムの知識をちゃんと持ってる人ではなかったので、もちろん自分も、お母さんにもちゃんと伝えられてないし、家族にも伝えられてないし、パキスタンのイスラム教だったので、文化とそれが混ざっちゃってるところもあって、ムスリムとしてやってほしいことなのか、パキスタン人としてやってほしいことなのか、いろいろ混ざっちゃってるところがあって。ムスリムの衣装は、パキスタンで着られている民族衣装のシャルワールカミーズっていうのがあるんですけど、ムスリムはそれしか着ちゃいけないみたいなことを言われてきて。

今、子どもが生まれて、子育てをしてて、すごく分かったんだと思うんですけど、子どものうちってやっぱり、難しいことは何も考えてなくて、楽しいとか心地いいとかそのくらいなんですよね。何が心地よくて、何がこれは嫌だっていう、それぐらいのことしかないの。もう私は感覚的に日本のほうがそういう意味で合ってる、日本がすごく心地よ

くて、日本人が好きで、ここでずっと暮らしたいなと思ってたので、いかに日本人に、学校に通ってる間は友達にいかに受け入れてもらえるか、仲良くしてもらえるかっていうのをすごく一番自分の中で大切になって。なので急に小学校の途中から、きょうから日本の洋服はダメ、シャルワールカミーズを来て学校行きなさいってなっちゃったときに、すごくかわいくないんで嫌だっていうのはもちろんあったんですけど、友達に受け入れてもらえなくなっちゃうってのがすごく怖くなっちゃって。どうなのかな、それを初日に着ていかなくちやいけなかったときに、すごい朝怖くて、どういう反応されるかなとか、友達、急にいなくなっちゃったらどうしようとか思いながら行って、案の定、どうしたのってなるんですけど、私もすごく友達には恵まれてて、そこまでいじめとかはじかれちゃったりとかなかったんですけど。やっぱり自分は居場所を取られちゃったようなすごく感覚があって、全くイスラムと関係ないのに、関係ないところでもまた苦しまなくちやいけないようになってきちゃったりとか。さっきの話してた文化の壁とかがあったりすると、イスラムが混同されがちなんですけど、イスラムと全く関係ないところで苦しんでるっていうところもあるんですね、第2世代の子たちというのは。

主人とも、長男を今後育てていく上で、どうしようかっていうことをすごくよく話し合ってますけど、いかに幸せになってほしいから、イスラムを教えるわけ、だけど幸せになるためには、ある程度つらい思いをしなくちやいけないときも出てくるし、大変な思いをしなきゃいけないことも出てくるけど、そういうときに、子どもたちにとって、一番何が支えになってくるのかなっていうのをすごく大事にしていこうねっていうのはすごく話し合ってる。やっぱりその子が大好きなものとかを理解してあげたり分かってあげたり、この子が大切にしているものがあるなら、それを分かってあげて大切にしていってあげてっていうのが大事になってくるんじゃないかなっていうのは、すごく感じますね。

クレシ 子育ての話がありましたし、実際お子さんが1人。

角岡 2歳です。

クレシ 2歳で。実際に妊娠中で来ていただいて、ありがとうございます。ダルウィーシュさんも今、お子さんがいらっしゃったり。

ダルウィーシュ 2人。

クレシ 2人いるし。今もここにお一人いらっしゃいます。ここ1時間ぐらいでだいぶ話

に挙がってたのは、親世代が次世代の思いを十分に理解していなかったりだとか、知識があまりなかったりだとか、あるいは形式的な側面にだいぶこだわっていたりとか、いろいろな点が挙がりましたが、今後既に第3世代を育てて、既に親としての第2世代として生活していらっしゃる方、あるいは今後、そういった機会にいらっしゃる方、私はこういうのはやめたいとか、親世代がこうだったから私はこういうことをしていきたいとかっていう、何か具体的な子育てをする上での方向性だったりとか、既にお考えの点があれば。例えば、ハニさんとかお考えの点があればぜひ。

ハニ 第2世代が親で、子どもには強要させたくないし、イスラムをちゃんとルール、理由、教えていきたいと思っていて。私も日本で生まれて日本で育ってきたんで、日本が好きなんで、日本人と一緒に、コミュニティと一緒にムスリムとして生きていきたいなという感じです。学校行ってるんですけど、インターナショナルスクール。先生とかは、ほとんど海外から来てる方で、第2世代が教えているのはグフロンと、あと何人かぐらいで、子どもと接することができる環境の学校があったらいいなとか、仮にもしも日本の学校に子どもに通わせたとしたら、私もやっぱ先生に、ムスリムとして生きてるんでって、強要させないで先生にも文化教えたり、ムスリムとして教えたりしていきたいなと思いますね。

クレシ ダルウィーシュさんとか何かございますか。

ダルウィーシュ 私、第一が、押しつけない。押しつけないっていうのと、自分がまず理解を深めてから、理解っていうか知識を身に付けていかないといけないなと思っていて、今は全然全然、駄目駄目なんで。ただ長男に限っては別の問題があって。イスラムから離れてしまうんですけど、自閉症なんですよ、長男が。だから生まれたときに、預言者ムハンマド様、アライヒッサラーム、その人を全面的にバックアップしたハムザっていう人をすごい尊敬していて、ムスリムの社会を支えられるような人になってほしいという思いでハムザっていう名前を付けたんですけど、まさかのまさかで、これからこうやって育てていこうっていうふうに夫と話していたときに、2歳ぐらいになったときに、自閉症っぽいなっていうのがうすうす感づいてきて、私は結構前から気付いてたんですけど、でも、旦那さんイラク人なんですけど、中東では精神系のちょっと医学っていうの、すごい否定的なところがあって、特に私のお母さんなんかは、典型的なんですけど、シャイターンがついてるとか普通にいうんですよ、うちのママは。旦那さんも、パパもそういうこと言う人なのかなってすごい不安に思ったんですけど。先ほど、ちょっとごめんなさい、名前が分からない。

アフメド アリアンです。

ダルウィーシュ 話してたと思うんですけど、今と昔の親の違いっていうのが、一番でかいなって思うのが、結構、お父さまがいろんな国に行ってるみたいで、ノンムスリムの社会を見てきているので、私の親の世代とかだと、全くそういうのがなくて、ムスリムの社会の中で生きてきたので、ちょっとグローバル化されたことで、今の新しい親世代は、もっと広い視野でこういうふう育てたらいいんじゃないのかっていうのが、多分ちょっと違うんですね、昔の親と違って。なので私の旦那さんも割とそれに当てはまって、「自閉症じゃないの？うちの息子って」言いだして、良かった理解がある人だったって思って安心して、今はムスリムとしてどう育てていくかっていうことよりも、まずちょっと知的障害も伴ってるので、まずそこが今うちにとっては一番大きい課題になっているんですよ。次男が多分、定型なので、今悩ましいのが、自閉症の子と定型の子をどうやって一緒に育てていくのかっていうのが、今、頭がそれでいっぱいなんですよ。なので当初からこう育てていこうっていうのが、今ガラガラって崩れていて、立て直してるところなんです。ちょっと重い話になってしまいましたけど。

クレシ 子育てっていっても、イスラム教育だけではなく、もちろん他の単純に子育てっていう大きな課題もある。

ハニ 日本って、習慣もそうだけど、ムスリムだから。さっきも言ってたんですけど、ムスリム、本当に、心、アッラーを。

グフロン いつも会話に出るんですけど、日本人って、先ほどおっしゃってたみたいに、ムスリムよりもムスリムだなっていうのは、すごい共感しますね。

グフロン だから、日本に住んでると、ムスリムとして生活するのが、すごく生活しやすいというか、日本人もムスリムみたいなので、全然すんなりとアッラーさえ信じて、イスラムの教えさえ分かれば、ムスリムらしく過ごせるんですけど。例えばインドネシアに行ったときとか、インドネシアにいる人たちは、もともと、ボーンムスリムでムスリム社会だから、形式的にやってる人も多かったり、そういう人たちと会話すると、この人はアッラー信じてるけど、イスラムを根本的には理解してないなって感じたりすることが多くて。

クレシ そこには文化が混ざってきてたりとかっていうことで、さっき角岡さんの話にもありましたように、イスラムというふうに親世代が示すものの中には、必ずしもイスラムではない文化に依拠するものが含まれていたりするとかっていうことですかね。

グフロン 皆さんおっしゃってたんですけど、外国の文化に触れたりとか、イスラムではない社会を知っている人って多分、ムスリムの社会しか知らない人よりも、すごくイスラムを理解していると思います。だからそういうのが親世代になってたりすると、柔軟に子どもを受け入れられるし。だからうちの親も日本の社会で、マイノリティとして過ごしてるので、きっと子どものマイノリティな気持ちが分かったりとか。だから外国に留学したりとか、外国人の友達を持つとかしていくのが、すごく親としては大事な要素なのかなと思いますけど。

アフメド 押しつけないっていうのがあったんですけど。親の役目っていうか、多少、導きっていうのは押しつけないっていうのもあるんですけど、強要しないっていうのも。教養を身に付けさせて、そうすれば自然と子どもはイスラムのほうに向かうと思うんです。最終的には自分たちがどうムスリムとして、より良いムスリムとして生きていくのかが、最終的には本当に重要になっていくので、まず根本的にはアッラーを信じることで、その後、一人一人もアッラーとの関係なんですけど、より良いムスリムになる。そのときに親って、先ほども、何回も言うのも失礼なんですけど、親は無知ながら、取りあえず海外からちゃんと、イスラム知識を教えてくれるような先生を呼ぼうってなって。そうすると、大抵呼ぶのは、ちゃんとしたイスラムの知識っていうのは、親世代の中ではちゃんとしたイスラム知識を持ってるとっていうのは、めちゃくちゃひげが長くて、日本からしたらちょっと受け入れがたいような人たちで、第1世代はその人たちを尊敬してるんですね。そうするとパキスタンの、ここで言うのもあれですけど、Desi スタイルっていうのもあるじゃないですか。

クレシ Desi スタイルをちょっと説明して。ハハハ。

アフメド Desi スタイル っていうのは、すごく自分たちの文化っていうのか、言っちゃえば自分たちの国以外のことはあまり知らないっていうか、外の世界のことはあまり知らない。

ジャミール 田舎という。

アフメド 田舎もそうですね。田舎みたいな。

グフロン 田舎もんみたいな。

アフメド そうですね。田舎っていうか、イスラムの知識だけであって、先ほども言ったとおり、グローバルな知識は全くないという人なんですね。そういう人たちを呼んでしまうと、親はその人たちからいろいろ学んで、それを子どもに押しつければ、結局負の連鎖が続いちゃうっていうのも何回も見てて、俺はそれを親世代に言うと、おまえは何が分かるみたいな感じになるんですけど、それは当然なんですけど。今、日本のこういう段階だなんていうのをちょっと違う角度から見て思ってた、年も年なので、これからちょっとずつ変わってって、多分これからは日本の文化も知りつつ、イスラムの文化も分かって、どっちも、両方持った人が中心になっていろいろ教えていったほうがいいというふうに思いました。

西澤 今後のあれなんですけど、だいが育てるほうからしてみたら楽にはなったと思います。昔はモスクもなかったし、いろんなイベント、本とかもなかったです。比べたらだいが楽になったし、両親によるんですけど、分かるんですけどその気持ちも。でも両親なりに頑張ってきたのも間違いないです。自分の子どもたちのために一番いいことを思ってやってたわけなので。もちろんそれは分かってほしいんです。ムスリム、みんなに分かってほしい。たとえば、気に入らなくても、絶対合わないんですよ、イスラムでも絶対合うとか、両親と絶対合わせなくちゃいけないとか、そういうのはないんです。両親と合わないけど、両親に悪い態度取ってはいけません。その後、クルアーンの中にあるのは、イステイグファールし続けなさい。悪い態度取ってはいけません、ウフも言っちゃ駄目だけど、その後イステイグファールし続けなさいというのがあるんです。学者が言ってるのは、なんでウフも言ってはいけない後に、イステイグファール、悔悟するのかというと、どうしても子どもと親の間で合わないところ絶対あるんですね。それがあった場合には、悔悟してくださいと、ちゃんと教えられてるんです。

あともう一つ、無知、無知っていったらあれだけど、日本に来た人たちの中でほとんど無知な人多いんです。無知っていうのは、現世的なこと？ 学歴も低いし、イスラム的にもそこまで知識ない人たちが多いんです、これは間違いないんですね。他のイギリスとかアメリカ見てたら、Phd とかお医者さんとか、エンジニアとか高学歴な人たちがいて、それはやっぱりそう。あとプラスでいうと、自分のお父さんは、ウルドゥー、母国語が日

本語じゃないんで、自分の奥さんに、ちゃんとイスラムを教えてないんですね。子どもの教育で一番教育をする人はお母さんなんです。そのお母さんがどこまでイスラムを理解してるかで、変わってくると思うんですよ。お父さんやっぱ仕事とか外行ってるし、子どもとは会わないから、でもお母さんは日本人だから日本語で説明できる。でもイスラムのこと知らないから、説明できない。今までの問題からいうと、お父さん側がお母さん側にちゃんとイスラムの話して、お母さんが説明していく感じだったと思うんです。今だとお父さんもお母さんも日本語分かる。ある意味それは楽なんですよ。自分たちがどこまで、大事なものは、イスラムの中で、さっきも言ったように、私たちは日本の文化も分かるし、例えばもっとイスラムを勉強していけば、許されてることとか、どのようにやっていいかっていうのがもっと分かると思うんです。その両立。

もう一つあるんですけど、パキスタンの方はパキスタンが大好きとか、お父さん側とか見ても、自分の国が大好きなんですよ、みんな。それは間違いない。それも悪いことじゃないんですよ。日本人だって日本が大好きです。日本と韓国試合になったら、絶対韓国応援しないです。日本応援する。それは当たり前の話です。僕たちは自分たちの母国っていうのがないんです。僕の場合特にそうなんですけど、パキスタンでもないし、日本でもない。なんかよく分からない。でもそれは結局、そんなに悪いことじゃないんですね。イスラムの今の状態から見たら。なぜかという、母国心が強過ぎて、同じイスラム教徒だけど、おまえは違う、なんか部族みたいな、おまえは他人だみたいなというのが結構あるんです。同じイスラム教の中で。でもムスリムのハーフの人たちはそれが無い。それが無いんです。自分たちはムスリムっていうのしかないんです。日本でもないし、パキスタンでもない。だからむしろ、ウンマとしては、共同体としてはすごい良いポイントなんですよ。今の現状から見て。それが言いたかった。

あとはどのように表現していくか、アプローチしていくか。家の中でそういう環境。あと彼がちょっと触れたんですけど、今まで呼んでた学者っていうのは、ピンからキリまであるんですけど、5本の指同じじゃないんで、いろんな学者が来てて、いろんな問題あって。大体ほとんどのモスクで問題があるんです、先生って。ほとんどの先生が目的が、礼拝を指導することと、子どもたちにクルアーンを教えるだけなんです、基本的に、ほとんどの学者が考えてる。でもこれから日本に住むことでシャリーアのこと、日本の法律が分かる、そういう学者が必要になってくるわけです。例えば普通の一般人とかも、シャリーアのこととか、細かい話は、そこまで勉強できない。勉強しても分からないことは結構あるんです。

今、たとえば群馬のムフティ・ジャービル先生なんですけど、彼は日本語をしゃべれるんです。自分で独学で日本語を勉強して、僕よりも、普通の一般人よりも日本の法律詳し

いです。彼がちゃんとイスラムの観点からも、日本の観点からも見て、ファトワとか話ししてくれるんです。すごい合うんですよ、日本に。でも今ほとんど呼ばれる人は、何年も日本に住んでるけど、日本語しゃべれない。日本語しゃべれなくて、子どもにどうやって教えられる。クルアーンしか教えない。イスラムはクルアーンだけじゃないんで。本当は全てのことも教えなくちゃいけない。そういうのがこれから自分たちも呼ぶ側になると思うんですけど、そういうときに、その呼ぶ目的？ 呼んでその後、何をしたいのか。ただ指導者として礼拝を率いるのか、それだけで終わるのかって言ったら、それも足りないんですね。これから呼んで、ちゃんと日本語、日本の文化、日本の法律というのをちゃんと教えていかなくちゃいけないと思います。それが今度自分が時間を出せない分、その先生が教えられるっていうのも、大きなメリットです。

ハニ 学校の先生に言ってほしいな。

ジャミール 海外からの先生っていうことに関してなんですけど、10年前とかは、そういう先生も結構少なくて、僕が小学校 5 年生のときは、全然いなくて、周りに。お父さんはお父さんで必死で、僕にイスラムを教えるのに必死で、モスクとか連れてって、そこで開かれるプログラムっていうのは、基本ウルドゥー語とか英語で、全然染みなかったんですね。ちょうどそのときに、救世主として現れたのが、アハマト前野先生で、僕の家近くに住むようになって。そういった先生が、これ以降も、もっと大事になるんじゃないかなって思って。要は日本で生まれ育って、生まれてなくてもいいんですけど、日本で育って、日本語を母国語とする学者っていうのが、これからの第 2 世代、第 3 世代に必要となってくるんじゃないかなと思います。

クレシ 今のムスリムコミュニティだったり、モスクだったりとか、学者だったりとかも全てが外国人ムスリム主導であるという現状があると思うんですけど、その中には先ほど何回か出てたように、文化にこだわっていたりとか、パキスタン人が例えばインドネシア人の間に何か派閥争いがあったりとか、パキスタン人の中でも民族によって何か争いがあったりとか、いろんなことが起きてると思うんですけど。例えば林さんやマティーンさんなんかは、アメリカでのそういった、日本ではない、ムスリムがマイノリティの国、とってもものすごい数のムスリムがいますけど、かつ林さんは日本人として、自らイスラムを受け入れている。そういった立場から、今の外国人ムスリム主導のムスリムコミュニティで何か思うことってあったりしますか。

林 皆さん言われたの本当にごもつともだなとか、思っていて。私、ムスリムになって、日本に帰ってきたんですけど、そのときに絶対に譲れないと思ったのが、私は日本人だっていうことなんですね。私は別にアラブ人になりたいわけでもないし、パキスタン人になりたいわけでもないし、私は私で、自分のアイデンティティーとして、日本で生まれ育ってきて、日本人の親がいてっていうのがあって、それなので、ちょっと話ズレるんですけど、結婚相手として、絶対に譲れないと思った条件が、文化とイスラムの違いを分かる人というところが絶対あって。アメリカ人の夫と結局結婚して、それはもちろん育ってくる中で、彼は彼なりにアメリカの文化とイスラムの教えていうところでいろいろ葛藤があっただけで、そこすごい重要だなと思ったんですよ。

日本ではやっぱり外国人の、文化とイスラムの違いが全然分かってないですっていう人が山ほどいらっしゃって。文化を大事にしてもらうのはもちろんすごくいいことだし、それぞれのアイデンティティーがあって、大事で、子どもに伝えていくのもそれはそれで大事なんですけど、それがイスラムだよって教えるのはすごく違くて。日本で育ってきてる中で、どこまで自分はやっていいのかとか、日本文化のここは（聞き取り不可 01:24:56）いいとかいうのは、個人個人で判断できるようにならないといけないと思うので、そういう意味ではすごく、皆さんおっしゃってたように、日本の文化を分かった人が、指導者になっていくっていうのがすごく大事だなと思っています。

それこそアメリカを見ると、第2世代の学者とかいっぱい育ってきていて、彼らの言うことって、当然ですけど、みんな共感できる部分がすごく多いわけですよ。自分と同じ文化の中で、イスラムではどうしたらいいかっていう話をしてくれるので。日本とアメリカの状態を比べると、人口比もありますけど、移民が始まったのはアメリカのほうが早いので、第2世代がもうちょっと早く出てきてて。そういう意味で、アメリカはいい感じに、ごめんなさい、私ヨーロッパは全然分からないんですけど、アメリカはすごいいい感じに根付いてきてるなっていうふうには思ってます。

1個、皆さんとシェアしたいなと思ったのが、私、友達がカリフォルニアにいて、この間遊びに行ってたんですけど、モスクを新しく作ったって言っていて、すごい大きい所で、バスケットコートがあって、卓球もできて、いろんなアクティビティーが子どもたちのために用意されていて、すごいねって話をしてたんですよ。そしたら、彼女とか周りの一緒にやってる世代が、自分たちが第2世代で、自分たちが欲しかったものを今、現実化してるんだよって言っていて。やっぱりそれいいなと思って。私はあれなんですけど、今こうやって、皆さん第2世代、日本生まれ日本育ちの人たちがいっぱい出てきてるので、今後にすごい期待したいなと思っています。

マティーン 全て僕が言いたいことは言ってくれました。僕の両親も、ちょっと違くて、もともとキリスト教徒だったんですけど、キリスト教からイスラム教に、私と私のきょうだい生まれる前に改宗されて。やっぱりイスラムを勉強せず、私たちを育てました。もともと普通の一般のアメリカ人のキリスト教徒と同じような文化を持ってて、なので、イスラム教で、例えばクリスマスとかハロウィーンとかになったときに、周りの友達がハロウィーンだったら、いろんな服とかコスプレとかやったりしてるんですけども、われわれはムスリムだよっていう感じで、必死に参加とかはしっちゃ駄目よっていう話は、どういうふうに話すのかっていう、われわれも見てたんですけど。

林 今に関連して思い出したんですけど、アメリカ人の友達の 1 人が言ってたのが、やれないことはやっぱり、クリスマスとか華やかで子どもたちが好きな行事が、ムスリムとしては厳しいという中で、その代わりに、イードとか、すごい華やかにするんですね、ラマダンとか。その子は、小さい頃からラマダンになると家をイルミネーションでデコレーションして、イードも、ものすごいパーティーをするわけですよ。すごいねって言ったら、親が、楽しめないクリスマスの代わりにものすごい力を入れて、ラマダンとイードを盛り上げろみたいな。

アウファ うちらもそうですね。

グフロン うちも、お祭りみたいな感じで、オープンハウスするんですよ。

アウファ 100 人以上が毎年。

グフロン 朝から晩までずっと入れ替わり人が。

林 そういう意味ですごい、オルタナティブを示すっていうか、できないできないって言うんじゃないくて、こういう楽しみ方ができるよっていうのを出していくっていうのが、上の世代としてはやっていくべきなのかなと思いました。ごめんなさい取って。

マティーン いえいえ。それもできるできない、ヤスミンがよく言われてたこと。

林 私にしゃべらないで、ハハハ。

マティーン 純ちゃんの説明がもしかして、伝えやすいかなと思ったんです。ヤスミンの友達だし。1人、先ほど話が、アメリカでお会いした方で、モスクを作ったときに、バスケットコートとか、モスクと学校と一緒にあったモスクがあるんですけど。彼女がよく講義とかに話すときに、彼女も第2世代で、両親がイスラムをまず教える、間違えた点は、まずいつも、できないところから教える。こういうことができないとか、それは駄目よというところから始めて教えるのが、あまり良くないなと。みんなが同じように言ってると思うんですけども。やっぱりアメリカでも同じようなことがありまして。私の両親は、強くこういうことはやっちゃ駄目とかいうことは言ってないんですけど、結構柔らかめに教えてたんですけど、まだイスラム教徒ではない家族はまだいたんですが。年配の人もいて、クリスマスとか、そういったときになって、独りぼっちになるのがかわいそうですけど、一緒にいたり、私たちの立ち位置は分かっているけど、クリスマスとかは、礼拝とかはしないけれども、家族は切りはしないということころもありました。多分ハーフの人とか改宗した人も、イスラム教徒ではない人もいると思うんですけど、宗教面で連携とかを切りにはいかないなということが分かりました、お互いの文化理解するに関しては、かなと思うんですけど。

グフロン さっき林さんがおっしゃっていたのに関連なんですけど、友愛、幼稚園から中学校までなんですけど、イスラミックスクールで、12月に文化祭のときに、僕がやりたかったことは、イスラミックスクールでも、普通の日本の学校と同じように、すごく楽しい行事ができて、すごく楽しんで学祭ができて、友達も呼んで、みんなと楽しく過ごせるんだよっていうのを、みんなに感じてほしくて。結局、あのときはすごく成功して、子どもたちも、今年1年間の学校生活で一番笑顔が多かった日で、1日がすごく光ってたんですけど。ムスリムでも普通の子と同じように楽しく過ごせるとか、ムスリムの友達同士でも全然日本の友達と遊ぶように遊べるんだよとか、クリスマスができないけど、他の部分で楽しいことができるっていうふうに、子どもたちに機会を与えるのはすごく大事だなと思いました。最初、学校の方針として、文化祭は、イスラミックバリュー、イスラム的価値観があるものをやりましょうっていうふうになってたんですね。だから子どもたちが例えばカフェをやりたい、お化け屋敷やりたいとかいろいろ言ってる中で、お化け屋敷は駄目だから、ジャンナへの道の迷路にしなさいとか、カフェとかも、ハラールカフェにしなさいとか。例えばフォトブースとかも作ったんですけど、アッラー大好きって言わせなさいとか。

林 ハハハハハ。

グフロン そういうことをムスリムをマジョリティで過ごしてきた先生たちが。そしたら子どもたちが喜ぶって言って。僕はそれは子どもたちは絶対に嫌がるし、もうすごく吐き気がするって分かってたので、それは絶対にやらせないって思って、ちょっとけんかみたいになったんですけど。

ハニ 分からないんだよね。

グフロン そう。子どもたちはフレンドカフェっていうのを開きたかったんですよ。でもハラールカフェにしたほうがいいとか。イスラミックバリューが欲しいとか言って。他の来校する人たちが、文化祭に来た人たちが、この学校はイスラミックスクールで、他とは違うんだというのを見せたいって言ってたんですけど、そこは僕が言ったのは、もう子どもたちがヒジャブを付けてるだけで十分イスラミックバリューだし、毎日毎日学校でクルアーン読んでるし、もう十分十分イスラミックバリューを毎日やってるので、文化祭の日ぐらい、子どもたちがやりたいことをやって、この学校でも楽しく文化祭ができるんだよというのを伝えたかったんですね。結局、上の話を無視をしてフレンドカフェにしたりとか、あとお化け屋敷も、シャイターンがうんぬんってなっちゃうんで、びっくりハウスにするとか。でもアッラー大好きとか言わせないとか、普通にやりたいようにやらせたんですけど。

僕は第2世代として、ジャッジはしない生き方をしてるので、それができるんですけど、日本のこれからのムスリムコミュニティと親世代にこうなってほしいなっていうのは、ジャッジしない環境が欲しいなって思っていて。多分、第2世代の方は、きっとその辺がすごく柔軟だと思うんですけど、例えば飲んでる人がいるから、あいつはすごい駄目なやつだとか、この人お祈りしないから、カーフィルだとか地獄だとかじゃなくて、子どもたちもそれぞれいろいろ葛藤がある中で、今飲んでるけど、もしかしたらいつか悟りを開いて、ちゃんとした道に行くかもしれないですけど。多分第2世代の方たちは、そういうのを経験してたりとか、マイノリティの中で経験してると思うので、柔軟になると思うんですけど、親の世代とか、ムスリムコミュニティの大きいコミュニティの中で、文化的な違いとか信仰のレベルの違いとかっていうのをジャッジせずに受け入れるような環境がすごく欲しいなって思います。長くなってしまいうんですけど、学校の中でも、子どもたちがあいつはお祈りしないとか、この家庭は緩いとか、ちょっとちっちゃいそついたりするたびに、うそはハラーム、おまえ駄目だみたいな、子どもたちの中だけでもジャッジをするような環境が生まれていて、親がきっとジャッジしてしまってるというか、子どもたちに

対しても。

ダルウィーシュ 親の影響ってありますよね。

グフロン あると思うので。

ハニ ママ友も、第1世代のママと、第2世代のママなので、葛藤ですよ。子育てに対して価値観が違うんです。同じ幼稚園の育て方も。

ダルウィーシュ 自閉症のところで私はつかかかってます。そういうのはイスラムじゃないとか言われたりして。

グフロン なので器を大きく構えて、今は駄目なことしてるけど、でもいつかちゃんとしてくれるかもしれないっていうふうに、ムスリムとして、器を大きく構えるのも大事だと思うので、そういうふうにムスリム全体がなってくればいいなって思います。

ダルウィーシュ ごめんなさい。私、親のことをディスってるような気がしてきて。名誉挽回じゃないんですけど。さっきのクリスマスというところで、あつて思い出したんですけど。うちの親もそれなりに頑張って、工夫はしてたんですよ。例えば、クリスマスなんですけど、実は私、小学生のとき、イードが年に4回あるって信じてたんですよ。何でかっていうと、ラマダンの後のイードと、犠牲祭の後のイードと、クリスマスとお正月、これうちの母がイードだって言ってたんですよ。これだけ実は唯一、私がムスリムで良かったって思ってたことだったんですよ。年に4回お年玉がもらえるからっていうのもあるんですけど。でも親は親で、自分が今、親だから言えることなんですけど、頑張って何とか私を導こうとしていたっていうのはあったんだなって、今ちょっと話を聞いて思い出したんですよ。

クレシ シャヘレヤールさんのお話にもあったように、親世代が悪者であるとかではなくて、彼らなりの最大限の努力、彼らなりの理解の中で、精いっぱい努力した結果、そこが届いていなかったっていう現状はあるにしろ、彼らが悪かったわけではない。言葉のあれだとは思んですけど、ということなのかなと思います。

きょう挙がってきた今後についてのお話なんですけど、子育てっていうのもありますし、今後どういうふうに子育てをしていきたいのかってお話もあれば、今既にたとえばいずれ

悟りを開くかもしれない飲んでる人だったりとか、そういった第 2 世代へのサポート、この二つなのかなと。これから生まれてくる人たちもあれば、今既に存在する第 2 世代のサポートだったりとかっていうのも必要なのかなというふうに感じました。あとはさっき言った海外事例をいかに参照するかっていうのも、向こうでは既に第 2 世代、第 3 世代がいろいろ経験して、いろんなことを模索して、こういった解決策が有効だと、これは有効ではなかったとかっていうのが既に出ているので、これをいかに参照していくかっていうのを重要であるのかなと感じたんですけど、そういったところで例えば角岡さんとか、海外の事例だったりとか、さっきバスケットボールコートとか、卓球だったりとかという話もありましたし、イードをいかに華やかにするかっていう話がありましたが、何かそれについてありますか。

角岡 私自身はそういった点は最初はけっこう無知だったんですけど、主人が改宗ムスリムで、ずっとスイスで育って、大学カナダとアメリカに通ってて、カナダの大学にいたときの友達がきっかけで改宗したものなんですけど。なので結構ヨーロッパのほうのイスラムの事情とかにも興味があったりとかして、結構主人もいろいろ教えてくれるんですけど。ちょうどタイムリーなことに、こないだある YouTube で学生さんの動画を見てたらしくて、ある学生さん、その方はイギリスで活躍されてる方なんですけど、大学で。その方の話によると、イスラムっていうのは、どの国に根付いても、その文化をすごく高めてきたものだったんですね。例えばイギリスの事例でいうと、イギリス人自身はそのイギリスの若者たち自身がイギリスの文化っていうものを忘れてきていて、知らない人がたくさんいる中で、そういった若者の中のイスラモフォビアっていうか、アンチの人たちですよ。そういう人たちからすると、やっぱりイスラムっていうのはアラブのもので、砂漠の国の教えで、イギリスやアメリカなんかには根付くわけがないと。根本的に合わないものなんだっていうところで、すごく嫌悪感を示してるんですけど、そのシェイク、学者は、イギリスのスタイルで例えばナシードを歌ってみたりとか、歌うそのスタイルがあるんですけど、イギリス独特の。古典的な歌い方で、アラビア語のナシードを歌ってみたりとか、カリグラフィも英語のカリグラフィスタイルで、いろんなアーヤを書いてみたりとか、融合のさせ方ですね、文化とイスラムの教えがそもそもすごく美しいものできれいなものなんですけど、それがいろんなアッラーが目的を持っていろんな国とか人種っていうものを作っていて、イスラムはどこに行ってもその文化を高めてきて、どこに行ってもより美しいものにしてきたっていうことをすごく話されていて。彼のそういう作品とか、出したものを、アンチの人たちが見ると、すごく驚いて、イスラムとイギリスの文化がこういうふうにマッチングするんだってことを知って、だからみんな驚くし、少し興味を持ったり惹か

れたりとかして良かったですね。

私はすごく日本のムスリムのコミュニティにも、そういった部分がすごく今、必要だなと思っていて、今の日本の若者自身も、あまり日本の文化とかに、日本というものを理解してない人が多くなってきて、そういった中でもムスリムが日本のスタイルで、イスラムを発信していくようになっていったら、すごく驚きもあるし、身にも、心も惹くだろうし、日本で育っているムスリムの第 2 世代の子たちにとっても、すごく自信につながったり、誇りになってきたりとか、より楽しいものを感じられてきたりとか、自分の宗教を、それはきっかけでもいいし、そうやって自分の宗教を好きになってくれたら、愛せるようになってきたりとかするんじゃないかなと思うので、そういった欧米の活動とかも参考にできると思うし。

あと、オサマ・キャンソンっていう方、みなさんご存じだと思うんですけど、彼が立ち上げた Taleef Collective というのがあって、その活動とかも、だんだんイスラムから離れていこうとしている若者と、新しく入ってくる人たちをターゲットに、主にそういう人たちの受け皿のような形で始まった団体なんですけど、そこでの活動を見てるとすごく私も楽しそうだなと思って。第 2 世代の子たちを教育して、新しく入ってきた人たちと、一人一人、マッチングさせて、一対一でずっとケアをしていくというか。それが第 2 世代の離れていこうとしている子たちにとって、なんでムスリムになるって人たちの話、すごく影響が強いというか、すごく新鮮なんですよね。

さっきお話あったように、ICOJ という団体、私も青年部のほうでリーダーをさせていただいてたことがあったんですけど、そこで女の子たちに、ある日本人の 80 代のおばあちゃんが、改宗して 3 日後に亡くなった方がいたんですね。その方の話をしたときに、みんなすごいねとか喜んでくれるかなと思ったら、ずるいって言い出したんです。女の子たちは、「えー、何それ。ずるい」と言い出して、80 年も人生楽しんできて、死ぬ 3 日前にムスリムになって、きれいな状態で死んじゃうなんてずるくない？ みたいに言って。そういう受け取られ方をするんだなと思って。「なんでずるいと思うの」って言うと、やっぱり「80 年間そのおばあちゃん楽しんできた」っていうんですよ。それって楽しいと思ってるんですよね、ムスリムじゃない頃の生活、周りの人たちの生活がすごく楽しくて幸せそうに見えるって。これ危ないなと思って。私は、キャンプのときに企画を立てて、新入信者の方に来ていただいて、自分たちの話を聞いてもらうという企画を作ったんですけど、やっぱりみんな口をそろえていうのは、全然楽しくないよって。みんなには、私たちはすごく自由で楽しく見えるのかもしれないけど、自分たちはもっともっと早くアッラーを知りたかったし、早く気付きたかった。私たちは逆にムスリムのあなたたちのほうが、すごくうらやましいし、幸せだと思うっていう話、大まかにいうとそういう内容の話になったん

ですけど。やっぱりムスリム自身、女の子たち自身が、自分たちがどれだけ幸せかというのに気付いていないのが、すごく悲しいなと思ったので、さっき今後のムスリムコミュニティに何が必要かっていう話が出たように、子どもたちにまず小さい頃は、すごく楽しい経験をたくさんさせてあげたい、幸せだっていう気持ちをたくさん味わせてあげたい、愛情を与えたり、もらったりっていう経験をまずたくさん積んであげたいという意味で、ちっちゃい子たちから若者までの抜け殻になるような場所を、今後必要だなと思っていて、そういう意味で、さっきおっしゃったように、海外での活動とか、すごく参照できるものが、たくさんあると思うんですね。

クレシ 分かりました。ありがとうございます。そういった子どもたちが、イスラム的なものを楽しくないもの、つまらないもの、苦痛、重荷だったりとかっていうふうに捉えている現状がある一方で、例えばイギリスの事例みたいに、ナシードだったりとかいろんな形で、あとはアメリカですね、サマーキャンプも、**Taleef Collective**、改宗者と若者でイスラムに戻ってくる者、あるいはイスラムに興味がある人たちへのサポートを行っている、たしか自分の知る限りアメリカの団体ですけど、そういったものを参照しながら、日本でもいろいろとやっていくべきだということですね。ありがとうございます。

今、具体的な、角岡さんの今後の構想ですね、それは今後の生まれてくる子どもたち、あるいは他者へのサポートっていうのもあるんですが、あとは自分のための自分のサポートが必要だという方も、もちろん中には全然いらっしゃいますし、自分のためにこういう環境整えてほしいとかっていう、その3点ですね。今後生まれてくる子どもたち、今いる人たちへの他者へのサポート、あるいは自分がこういうサポートをしてほしいという、お一人ずつお伺いしたいなって。今、角岡さんがおっしゃっていただいたように、皆さんにも一人ずつ最後にまとめとしておっしゃっていただきたいなと思うんですが。また最後はアフファさんで締めるっていう形で。マティーンさんからお願いします。

マティーン そうですね、その三つ。先ほど角岡さんが言ってた、ケンブリッジにいらっしゃる学者さんが、文化イコールイスラムではなく、地域の文化を持って、そういうアッラー、イスラムをきれいにする美術を使って、ナシードだったり、絵だったりを作りました。一応日本で日本の字を書ける学者さんを。

林 カリグラフィー。

マティーン カリグラフィーを書く方も、言葉があれなんですけどね、英語です。なので、

そういう美術のことに關しては、僕ももともと美術関係なんですけど、美術がこれから大事になってくることだと思います。先ほど伝えた、貢献、どういうふうにイスラムを説明するかということ。美術もいろんな、ナシードだったり、絵だったり、動画だったりを使って説明するというような、紹介するということが大事になってくるかなと思います。

私もいろんなことを考えたりして、私が子どもが生まれたら、どういう葛藤になるかっていうことをよく考えたりしたんですけど、私が子どもの頃に、アニメとかを見たりしたんですけど。普通の一般のアニメ見たんですけど、たまに確かムスリムスクールに通って、その学校にたまに、すごいちょっと、あまり格好良くない、楽しくないちょっと若干ださい、ムスリムが無理やりした、パペットの番組を見せたりしたんですけども、彼がウドゥーの仕方とか、お祈りの仕方とか、ハラールに対してのいろんな話があったんですけど、子どもの目から見ると、何だこれっというようなこと思ったんですけど。やっぱりムスリムではないお友達たくさんいましたので、ムスリムのお友達と、ムスリムでないお友達の区別はそこまで子どもだったからしなかったんですけど、同じアニメとかを見てるから、やっぱりそれを見比べると、先ほどのたぶん第1世代の人たちが作ったものなんですけど、一応、心は分かるんですけど、もっと若い人が、第2世代の人が作ったらもっと子どもが楽しめるかなと思ってるんですけど。なのでそういうところから、今の社会ではエンジニアとか科学者とかがたくさんいるんですけど、美術家がそこまではいないので、美術に關しては、美術の世界はいろんなものがあるので、それを今の社会、日本にいる第1世代、第2世代の人たちが見つけたりして、どういうふうに子どもたちとか、われわれとかに楽しめる、例えば動画とかファッションとか、絵とかを作るかっていうことも大切になってくるかなと思います。私はいろんなことを企画したんですけど、なかなか進めなかったんですけど、あとでパソコンを持って見せたいなというものが一応あります。すいません、お話が長くなりました。

林 私は3点あるなと思っていて、まず第1は、文化とイスラムの峻別ですね。どこまでがイスラムでどこまでが文化なのかっていうのを見極めるっていうか、日本でやっていく上で不可欠だと思うので、それを第1世代だったり、外国から一時的であっても日本に来ているムスリムに、そこを分かってほしいっていうのの働き掛けみたいなのがやっぱりやっていきたいっていうか、誰かにやってもらいたい、みたいなところがあります。

二つ目としては、第2世代が中心になると思うんですけど、ムスリムの人たちがさまざま分野で活躍するようになってほしいなと思っていて。ムスリムとしてのムスリム内部のつながりとか、イスラムのレベルアップとか、ムスリム内部での働きってすごく大事だと思うんですけど、それって日本で生きていく上では、外との関わりってすごく大事だと

思って、その両輪だと思うんですよ。私たちやっぱりもちろん日本でイスラム学者とか必要だし、みんなにムスリムのこと考えてほしいですけど、でも同時に全員が全員、イスラム学者だったら困るわけで、外でいろんな人たちと触れ合っていく、役割を果たす人たちが、どんどん増えてほしいなと思っています。

3 番目としては、最初にちょっと言ったんですけど、他のマイノリティとの共同っていうところでした。割と第 1 世代の人たちって、ムスリムしか知らないからだと思うんですけど、ムスリムはマイノリティでムスリムはこんなに差別されていて、ムスリムは大変な思いをしているみたいなスタンスの人多いと思うんですね。でも、日本でムスリム、もちろんマイノリティですけど、マイノリティはムスリムだけじゃないし、日本でムスリムが快適に過ごしていけるようになるためには、他のマイノリティが快適に過ごせるような社会の状態にしていくことが必要だと思うんですよ。なので、他のマイノリティとの共同ってというのは、今後のムスリムの社会を考える上で、外せないかなと思っています。

クレシ もし何か加えることがあればどうぞ。

角岡 大丈夫です、すいません。

クレシ よろしいですか。

ダルウィーシュ 自分へのサポート？

クレシ 自分への、もしくは他者への、もしくは将来へ向けてやっていきたいこと、やっておくべきこと。今後の構想を。

ダルウィーシュ 私、今のところでは 100 パーセント日本人で改宗した人を中心にインタビューして、なんで改宗したのっていうのをビデオに撮ってるんですけど、割とそれが自分にとってすごく刺激にもなっていて。一人一人話が違くて、こういうふうに導かれたんだっていうのを見てると、再確認みたいな感じなんですけど、自分の中で。たまになんですけど、ムスリムコミュニティの中で疲れちゃうときがあって、はあ、やめたいなとか思ったりするときもあるんですけど、でもインスパイアリングな話を聞いていると、やっぱり私この道が一番好きとか。それが結構自分へのサポートにもなっているんですよね。それをシェアすることで、周りの人も、フィードバックが来てるんですけど、ビデオ見たおかげで改宗する決意ができましたとか、ヒジャブかぶることになりましたとか、そういう

のも来ていて、自分何かしら貢献はしてるんだなっていうふうに。たまにバッシングもあるんですけど、あまり自分を、さらすっていうのは女性ムスリムとしてどうなのとか、やっぱりちゃんとかぶってないと駄目だよとか、向こうも間違っただけとは言っていないし、正しいので、私も言い返さなくて、ズーンってなったりするんですけど。でもそれと同時に、自分が作り出したコミュニティに相談すると、バックアップっていうか、サポートしてくれたりして、今はお互いジャッジせずに、それでもガイドするっていうか、いずれヒダヤーがありますよねみたいな、励ましの言葉をお互いに投げ合ったりして、そういうのが今、出来上がってきているかなって思ってるんですね。次のステップとして考えていたのが、誰かがやってくれないかなと思ってはいるんですけど、私みたいにムスリム 2 世で、しかもハーフっていう人たちの話も聞きたいなって思ってた、そういう動画も作れたらいいなって思ってます。以上です。

ジャミール さっきの話になっちゃうんですけど、イスラムからそれてしまった人のケアっていうことに関して、僕がずっとクルアーン読みにモスクへ行ってたんですけど、そこで大親友がいて、ずっと一緒に読んでたんですけど、高校入って、僕が部活とかで忙しくなって、行けなくなって、2年後ぐらいにその人に会ったら、もうめちゃくちゃ変わってたんですね。クラブとかに行くようになって、お酒とか豚とか全然気にしなくなって。めちゃくちゃ悲しくなったんですけど、そのときにお父さんとかにいろいろ相談して、どうしたらいいかなと思って。そしたら、いろんな人が教えてくれたのは、そういう人たちと縁を切っちゃうと、彼らは戻って来れなくなるから、縁だけは絶対切らずに、ちょっとずつイスラムの道を教えてあげたり。彼ら自身も、僕も彼に聞いたんですけど、罪をしてるっていう自覚はあるんですよ、彼らは。僕が一回聞いたときに、彼が答えたのが、ハッジをしたら全部罪が許されるから、俺は 25 歳でハッジして、その後はなんもクラブとか行かないからって言ったんですね。

ダルウィーシュ それずるいでしょ。

一同 ハハハ

ジャミール それずるいし、まず、そういうのはニーヤが関係してくるから、まずアッラーもそれ知ってるから意味ないんじゃないって言っても、聞かないですね。でも 1 回入っちゃってるから、戻ってくるのはすごい難しくて、人間の力には限界がありますから、あとはアッラーのヒダヤーを待って、縁を切らずにやっていくのがいいんじゃないかなと思

います。以上です。

アリアン ちょっと宣伝気味になっちゃうんですけど、先ほど出た話に対して、ナシードとか、一人一人、一对一のケアというところで、既に、高3ながらなんですけど、一応始めてるんですね。僕のTwitter見たことある人いますか...頑張ります。

一同 ハハハ。

ダルウィーシュ 教えてください。

アリアン あっはい、ぜひ。ムスリムっていうか、日本人から見てもおかしくないような内容で、いろいろ投稿したりして、最高、リツイートというのがあって、共有されるんですけど、300、400いったりだとか、そこまで多くはないんですけど、そういうのを一応始めてるんですね。ナシードとかそれもすごく大事だなと思って、やっていると、自分にちょっと能力が足りないなど。自分のためのどういう環境を整えてほしい、自分をより良くするのにどういう環境があってほしいっていう質問だったんですけど、僕はアルハムドリッラー、すごい恵まれたので、次は自分が環境を与えなきゃいけないんだなと思って、自分が環境を与えるための自分の能力というか、自分の整ってないので、今一人一人のケアってやつで、いろんな所へ行ってらるんですね。先日は名古屋にも行って、それ以外では北海道のほうにも足を運んで。まだ近くなんですけど、埼玉、横浜とか、いろんな所に行って、そこで直接、子どもたちと話して、悩みを聞いて、まず自分の顔を知ってもらおうっていうのを、やってるんですけど、高3なので、そこまでお金もないっていう。単純にいうと、最終的にお金がないっていうところと、言い訳っぽいんですけど、そういうのでいろいろ歩き回って、同じような境遇の人を捜して、一緒にやってくれないかみたいな、1人だときつくなっちゃうっていう、この二つなんですけど、人数とお金に関してがすごく最近の悩みで、でも一応インシャーアッラー、目標では2月13日、バレンタイン前日が誕生日なんですけど、それより前に何か載せようっていうことで、今やっています。宣伝気味なんですけど、その後もよろしくお願いします。

西澤 僕が考えた中では、大きく分けて四つのものに対して努力しなきゃいけないんですけど、一つは第1世代として、生まれたときからムスリムで、最初から移住した人たちに対して、日本の中で住む上で、彼らが必要なことを助けてあげる。二つ目が、改宗ムスリムですね。彼らは日本の社会の中で改宗したことで、すごい変わっちゃうんですね。例え

ば、海外から移住した人たちは、できることで、改宗ムスリムにはできないことがあるんです。それは日本の教育の中でできないって言って、自分の国に連れてって教育させちゃう。もし日本改宗者で、子どもが日本にいたら、できないんです、簡単に。彼らに対してそういう努力。あとは若い人たちで、2世3世これから、僕から見たら高校生とか大学生、その年代の人たちに対しての努力ですね。それはまた、もう一つは子どもが生まれてきて、これから生まれてくる子どもたちに対して、絵本作ったり、ナシードとか、たくさんあるんです。離れていった人たちもたくさんいるんですけど、そういう人たちも調べたいとかイスラム学びたいと思うことあるんですね、絶対。そういうときに情報がないとどうしたらいいというのが。まだまだ日本に、海外だったら、イギリス、アメリカとかムスリムがいっぱいいて、いろんなツールがあるんですけど、YouTubeもあるし、いろんなSNSで、イスラム発信したり、絵本もイスラムのナシードもあります。そういうのがまだまだ日本にないんですね。そういうのもこれからもっと増やしていくべき。絵本とかイスラムの関係のナシードも。アハマド前野さんが投稿されてるんですけど、イスラム学を動画で、YouTubeで頑張っているように、みんなで団結して努力していくことで、自分でできないことをサポートしていく。あとはアフターフォローというか、いろんな大変なことになってる人たちをフォローしてあげたりとか、自分たちができないことで、みんな団結することでできることあるんです。団結したらアッラーの慈悲がその上にあるという。何事もやっていくことで大事なのが、ハラールの関係で問題だったのが、ハラールの市場が始まったときに、いろんな所が認証機関作り始めて、すごい問題になっちゃったんです。そういうのバラバラになっちゃうと、日本側からしても何が違うのとか、これとこれいろんな問題があるんです。団結、聞きながらとかしていくことで、まとまって、日本のまだムスリムじゃない人たちに対しても、イスラムはこれなんだって。バラバラだったら何がイスラムなのってなっちゃうから。一つだったら、分かりやすいですね。そういうふうにみんなが団結して、ドゥアーして、努力していくことが大事です。

シャハラ 宗教と文化の押し付けについてなんですけど、小さいときから文化と宗教の押し付けをすごい感じて、子どものときは、何が文化で何が宗教かというのが分からなくて、その違いを自分で気付くまでにすごい時間がかかって。それをこれが文化なんだ、これが宗教なんだよっていうのを区別して示してくれてる人がいたら、もっと生きやすかったんじゃないのかなと思って。あと、どうしても文化と宗教は、融合するとは思いますが、それは当然のことだと思うんですけど、サウジに行って、サウジの文化にあったイスラムの形があったし、スリランカはスリランカで、厳格なムスリムの形があったりっていう、それもあって文化について、イスラムの形がそれぞれあるんだなっていうのに気

付いて。日本でもムスリムの形、新しいマイノリティの人たちが日本に住むってなったときのムスリムとしての生き方とかあり方っていうのを、新しく生むというか、確定していくのは私たち第2世代からなのかなって思ってて。それを親世代にまた受け入れてもらって理解してもらってというのが、今後の課題なのかなって思います。

ハニ 先ほど言ったように、ムスリムみんなが一つになるっていうのが、すごい大切だなって思って。子ども3人育てて専業主婦なんですけども、やっぱ、いっぱいいっばいで。同じ同級生としてママ友として話したりするけど、例えば今後どうしようというときに、第2世代の同じムスリムの人たちとこういう機会があったりしたら相談できるし、いいなと思ったりしますね。だからこういう第2世代のコミュニティ、こういう機会がアルハムドリッター、いいなと思ひまして...

ダルウィーシュ 大丈夫？

(無音)

ダルウィーシュ 私、ママ友。

ハニ ありがとうございます。すいません。息子も4歳になって、絵本とか動画とか作って、みんなで作れる。私も大学生のときに、第2世代のときになんかできないかって思ってた。すごいみんなそういうこと考えてるんだなって思って、すごい未来が明るくなってるっていうか。この第2世代のコミュニティも、ムスリムが一つになっていくことを願うばかりです。みんなの力を合わせていきましょう。

ダルウィーシュ よろしくお願ひします。

クレシ お願ひします。ありがとうございます。

グフロン 美術の話もあったんですけど、僕自身も学校で美術を教えていて、大学は経済学部なんですけど、大学院で美術を勉強しまして、ロンドンとニューヨークに美術の勉強をしに行ったんですけど、やっぱり美術に触れる中で、それ自体はイスラムの勉強ではないけど、造形美とか色とかを見つめ直す機会になったんですね、勉強する中で。それを通してこの世界の素晴らしさを考え直したりすることもあって、今でも学校に花を生けたり、家

の庭を掃除したり、お花を世話したりするんですけど、学校でも花を見て、ただの花でもそれに対して感動したりとかしてくれたりしてるのを見てると、人って美しいものに対して感動するし、それを通して今まで考えてなかったことを考えたりするきっかけになったりすると思うんですが、人生ってすごいシンプルで、本当はみんな生きて死ぬもので、ムスリムも誰でもかんでも死んでいくと思うんですけど、そういう美しいものとか美しい表現を通して、この世界の素晴らしさっていうのをいろんな人に気付いてほしいなっていうふうに、願いになってしまうんですが、第2世代のムスリムとして、イスラムとして、クルアーンとかを通して、人に対して、イスラムを伝えていくのも大事なんですけど、僕が思うのは、世の中にある全てのものがアッラーの作ったもので、ちっちゃい虫とか花の色とかそういうを通してでも人ってイスラムを見つけることができるし、そういうのに感動して、前まで何も気付かなかった人が悟りを開くかもしれない。なので先ほどおっしゃったように、そういう直接的にイスラムではないものを通して、美しいものとかを通して、何かできればなって、個人的な願いなんですけど、アッラーが作ったこの世界はすごい素晴らしくて、生きて死ぬまでの間に、少しでも朝日に感動したりとか、風に感動したりとか、そういうふうに思う機会が増えればなと思ってます。

アウファ 今回この会があって、本当に良かったなって思うのが、今まで23年間、何も考えてなかったようで、実は皆さんがお話ししてたことをずっと思ってたんだなって。きょう聞けて本当に良かったなと思ってます。

今後の活動というか生活について考えたときに、自分はもうサポートはあんまり、今までも、まあ家族のサポートはあったんですけど、そこまでサポートは必要としてなかったんですけど、友達とか第2世代の道がそれてしまった友達とかを見てると、戻ってほしいなとかいう気持ちは毎回あったり、改宗した友達とかも見て、もっと世界を分かってほしいとかあるんですけど。自分がそこで何ができるのかって考えたときに、自分は今まで日本でイスラム教徒として生きていくときに、イスラムに関係なく普通に生きていきたいっていうのが一番あって、いかに普通に生きれるかってのが一番上にあっただので、大学するときも、いかに自分が浮かない存在なのか、それが見た目から入ってたんですね。それがヒジャブというところがあったんですけど。ヒジャブでいかに日本人みたいに見えるのかとか、いかにヒジャブしてる人って思われなくていいかってことで、日々追求してたんですけど、それをメディア発信するようになって、初めて発信して声を頂いたときに、これが自分なりの貢献できてることなんだと分かったときがすごいうれしかったので、普通を求めていることがみんなの助けになるんだなってというのが、これからも大切にしたい気持ちで。ちょっとまとまってないんですけど。

今後第 2 世代のサポートとかを考えたときに、まだまだマイノリティだし、多分日本にいる以上、マジョリティになることは恐らく難しいと思うんです、ずっと。今よりは増えてると思うんですけど、マイノリティのままではあると思うので。マイノリティの人は、私はマイノリティなんだっていうのもっと示すべきなんだなっていう、イメージをもっと出していくこと。それがただ私はかわいそうなんだって訴えるだけじゃなくて、私はこういう人間なんだ、こういうふうにサポートしてほしいみたいな、そういう意思表示をもっと示すべきなんだなと思って。それが多分、まだ分かんないんですけど、個人個人の中で、頭の中で解決してるだけであって、行動にはまだ示せてない部分があると思うので、私の場合は、マイノリティであることを。

ダルウィーシュ　なんか分かる。

アウファ　分かりますか。すいません。サポートされたいなら、待ってないで自分から行動するべきだ。私の場合はファッションという観点から、まずイスラムのイの字も分からないような人が、見た目から入ってもらえるようにとか。言葉で説明するよりも、見た目っていうか、世界観を伝えるのは重要だと思うので、今後やり方はたくさんあると思うんですけど、私的には今まで 23 年間、子どもの時代、言葉で説明されても分からないときもあったから、だからこそ見た目っていうか、外観から入っていくことで、さらに重要になるんじゃないかなって、私は思いました。

ダルウィーシュ　ロールモデルなんですね。

アウファ　そうですね。まだまだ見本になるような人って、全然いないと思うんです。私が言っちゃあなんなんですけど、それが私が第一人者になるべきだなって思って。第 1 世代が、第 2 世代がって、さまざまな分野で活動してる人がいると思います、学者面で活動してる人とか、教育面とか。私の場合は、若者が入りやすいようなコンテンツから入れるのがすごい強いなと思って。これも今後は自信持って、活動していきたいと思うので、サポートよろしくお願いします。あっ結局サポートは、必要になっちゃった。ありがとうございます。

林　一言だけ良いですか。話聞いてて最後にちょっと言いたいなと思ったんですけど、マイノリティであることって、もちろん私たちにとっては、避けがたいあれですけど、日本社会全体から見たら、マイノリティがいることって、すごい社会全体を豊かにすることだ

と思うんですよ。なのでそういう意味で、私たちは、自分たちがマイノリティだということを、引け目に感じる必要はもちろんないし、むしろ私たちがいるおかげで、日本社会豊かになってるでしょぐらいな、貢献してるんだっていう意識を持っていったいいんじゃないかなと思います。

クレシ ありがとうございます。皆さんの今後の構想だったりとか、刺激になりますし、僕自身も、生意気な司会なんかさせていただいているわけですけど、僕もぐれたかどうかという冒頭にありましたが、僕もなかなかのぐれ具合です。私事ではあるんですけど、本当にムスリムとして生きるって選択をしたのはごくごく最近なんですね、実は。本当に2、3年とか。その程度なんですけど。もともとムスリムの友達は全くいない状態で、1人ロールモデル的な存在が幸いいたんですけど、そういうのに恵まれてない人ももちろんいますし、ロールモデルがないってのは恐らく第2世代どこの国でも、それが定めなのかなと、第3世代は第2世代、第4世代は第3世代がいるけれども、第2世代は自分がロールモデルになるしかない。第2世代が今後ここにいる皆さんを始め、いろんな活動していくんだと思いますし、それに期待をするわけですけども、他者へのサポートっていうのももちろんある中、自分自身のサポートももちろん必要だって、僕自身もすごく感じるんですね。2、3年前、ムスリムとして生きるって選択をしたときに、今までの友人関係とかも、もちろん崩れるわけで、何か例えば相談をしたい相手だったりとか、何かつらい思いをしたときに、頼れる相手とかがって本当にいなくなっていくわけですよ。もちろん、それは自分から離れて行ってる場合もあれば、向こうから離れていく場合も、双方からだと思うんですけど。少なくとも、ノンムスリムの友達がいるっていうことは素晴らしいことですが、ムスリムであるからこそ相談できることってもちろんありますし、せっかくこうやって皆さん集まってくださったので、ぜひつながって、今後もいろんな悩みの共有だったりとか、今後の活動の相談だったりとか、いろんな面で、単純にムスリムの仲間がいるっていうことだけでも、個人的な意見ですけど、ものすごくパワフルなものだなと思いますし、さっきあった団結という言葉だったりとか、一つになるとかっていう言葉だったりとかありましたが、本当にそれは重要だなと思います。ここにいる皆さんを始め、第2世代あるいは改宗者の方々だったりとか、外国人の中でも日本を理解している、現状を理解している方で、今後の日本におけるイスラムのあり方、ムスリムコミュニティを変えていきたいなっていうふうに、インシャーアッラー、思います。ジャザークムッラーハイラン。閉会のあいさつを。

岡井 改めて、早稲田の岡井でございます。本日は長丁場、朝からどうもありがとうございます

いました。いろんなお話がありました。お話を伺いながら、皆さんのお手元にある緑の、これ 10 年前に出した本なんですね。こういう会を始めたのは、ちょうど 10 年前で、そのときは第 1 世代の人たちが中心になって、その時々課題について話をしたわけです。すごい懐かしいなと思ったのが、このとき、話をしに来てくれた中の 1 人にアミンくんのお父さんがいたんです。今はお父さん、もちろんまだ第一線で活躍されてますけど、今はこんなに立派に、活躍をしている第 2 世代というのが出てきている。当時いろんな話が出たんです。子どもの話もちろん出ました。今との違いは何だろうと考えたら、当時子どもだった人たちっていうのが、自分の言葉で今のことを、あるいは未来のことを話すようになっていく。プレーヤーが増えているってことなんだろうと思うんですね。大きな流れでいうと、日本っていう環境の中で、イスラムとかそういったものがなじんでいく過程なんだろうなっていうのをしみじみと感じた次第です。

今回いろんな話がありました。すぐ解決できるような問題っていうのもあるでしょうし、もちろん時間をかけてじわじわと解決していくようなものもあるんだろうと思います。きょう本当に大切だったことっていうのは、いろんな話っていうのをシェアできたことなんだろうというふうに思います。課題をシェアできたし、人がつながることができた。これがまた次につながっていくんだろうと思います。今回のミーティングは、より良い将来に少しでもつながるものになればいいなと思っています。今、この部会はヤングの会ということでやっていますが、きょう出た課題の中には、同世代がつながることで分かることももちろんあるんですけど、第 1 世代であったり、あるいは次の世代とつながることも大切になってくると思います。

この後お昼ご飯の時間を挟んで、第 1 世代の人たちが中心になるセッションというのが引き続き開催されます。その中では第 1 世代と第 2 世代の交流ももちろんあり得るかなと思いますので、どうぞ長丁場になるんですけど、引き続き、お付き合いいただければ幸いです。きょうはどうもありがとうございました。

店田 長時間ありがとうございました。この会を主催している 1 人の店田と申します。途中からお話をいろいろお聞きしました、非常に実のあるといいますか、非常に良い話をたくさん聞いてこられました。岡井くんのほうからいろいろご案内がありましたように、1 時から次の第 1 世代、皆さんのお父さんに当たる方、あるいは場合によってはおじいさんに当たる方もいらっしゃいますので、一緒にお話に参加していただく時間も設けたいと思いますので、ぜひこの後ご参加ください。

本当にきょうは長時間ありがとうございました。またこれからもよろしく願いいたします。またこういう機会を、今回初めての機会だったんですけど、これから来年以降も形

を変えてということになると思いますけど、こういう機会を設けるように、われわれとしても努力したいと思いますので、どうぞよろしくご協力のほどよろしく申し上げます。ありがとうございました。懇親会、東京穆斯林飯店で 6 時半ぐらいから始まると思いますので、ぜひ無料ですのでご参加ください。一般の参加、後ろにお集まりの方もご参加いただいて構いませんので、お願いいたします。お弁当は隣の 703 に用意してありますので、申し訳ありませんけど、こちらの荷物をお持ちになって、隣の部屋に移動をしていただきます。ありがとうございました。

一同 ありがとうございました。

店田 礼拝のスペースも 701、703 にそれぞれ男性、女性用があります。

(了)